

弘前市立弘前図書館蔵 『物種真考記』 翻刻

(翻刻／網野 可苗)

〔外題〕 物種太郎 上(中下) (後補書題簽、本文と別筆、表紙より後のもの)

〔内題〕 物種太郎 第壹(〜十)

(第一冊) 第壹〜三・(第二冊) 第四〜六・(第三冊) 第七〜十

〔尾題〕 物種太郎敵討

〔刊写〕 写 同筆※

※(上)一〜四丁、(中)三六丁、(下)五二丁は別筆、別紙のため後補か。
題簽とも別筆。

〔数量〕 一〇巻3冊

〔形式〕 縦22×横15.5cm

〔作者〕 不明

〔序跋〕 なし

〔蔵書印〕 七種(弘前図書館、福本蔵書(後補の後か)、貸本屋か)

(1 1才)

物種太郎惣目録

第壹

一 徳川上総の助忠輝公御鷹野の事

并 佐々木内膳義遠恥辱の事

第貳

一 物種太郎利休か事

并 不破万左衛門不覚の事

(1 1ウ)

一 物種太郎芦屋方江打手の事

并 佐々木義遠金平を生捕る事

第三

一 不破万左衛門物種をあざむく事

并 佐々木義遠勇気の事

一 忠輝公関ヶ原出陣の事

并 不破悪計百性一揆の事

第四

(1 2才)

一 佐々木義遠一揆をしづむる事

- 并 不破鉄砲にて義遠を打事
- 一 揆の百性四人死刑の事
- 并 中瀬村助六孝心の事

第五

- 一 百性助六玉薬入をひろふ事
- 并 不破陰謀露頭ちくてんの事
- 一 物種新左衛門矢野内匠切腹の事

(1 2ウ)

- 并 佐々木甚蔵敵討願の事

第六

- 一 物種母貞義を守り自害の事
- 并 物種太郎敵討を願ふ事
- 一 忠輝公御仁心敵討首途の事
- 并 不破常重福嶋江奉公の事

第七

(1 3才)

- 一 佐々木主従大坂へ登る事
- 并 不破惣兵衛人違の事
- 一 物種太郎京都へ登る事
- 并 大津宿屋にて盗人を計る事

第八

- 一 物種東坂本に閑居の事
- 并 北野絵馬舎にて甚蔵に逢の事
- 一 千の宗三芦や釜拝借の事

(1 3ウ)

- 并 宗三岩倉了祐を欺く事

第九

- 一 岩倉了祐京都を立退く事
- 并 常重宇治槇の嶋に忍ぶ事
- 一 佐々木物種同道宇治へ登事
- 并 岡平不破を見付る事

第十

(1 4才)

- 一 真杵弥平治を殺す事
- 并 物種佐々木不破を生捕る事
- 一 物種佐々木敵討の事

并 宇治通圓茶の由来の事

惣目録終り

(1 5才)

物種太郎 第壹

徳川上総介忠輝「たゞてる」公御鷹野「たかの」の事

并 佐々木義遠「よしとを」恥辱「ちじよく」の事

(1 6才)

物種太郎 第壹

徳川上総介忠輝「たゞてる」公御鷹野「たかの」の事

并 佐々木義遠「よしとを」恥辱「ちじよく」の事

桃李「とうり」不言「ものいわず」春幾暮「はるいくばくかくれ」煙霞無跡「ゑんかあとなしむかし」

昔誰栖「たれかすむ」と管「かん」三位の詩「し」むべ成かな爰
に越後の国三嶋郡「みしまこほり」与坂「よさか」の領主徳川
上総介越後中将源忠輝「たゞてる」公と申奉るは東照神君の九男にてわたらせ
給ひ剛氣「かうき」短慮「たんりよ」の君にてぞ有ける

(1 6ウ)

元来小鷹狩「こたかがり」をこのみ給ひ近習小「こ」

性「せう」をはつかしたがへられみづから山野「さんや」に

あそび御なぐさみとし給ひける此「こゝろ」は

慶長「けいちやう」元年春三月鷹狩「たかの」のもよふし

有領内「りやうない」交野「かたの」に出給ひ鷹「たか」をつかひ

給へば近習小性十五六人みな殿「と」と一様「やう」

に装束「しやうぞく」し春の野辺に遊行「ゆぎやう」し霞「かすみ」

をわけ露「つゆ」をふみ鴨雁田鶴「かもがんだづ」に至る迄

鷹にとらせてたのしみとよるこひ給

(1 7才)

ひける折から春を見すて、去「いぬ」雁「かり」かね

の五六羽「は」ならひ行を忠輝「たゞてる」公きつと見

給ひあれ射「い」ておとせと下知し給へば

かしこまつて候と不破「は」万左衛門康重「やすしげ」弓矢

をつがひて立むかへば佐々木内膳「ないぜん」義遠

いや某が仕り日比の射術「しやじゆつ」を見せ申さ

んと康重よりも先「さき」に立よつ引て放「はな」

ちけるに何か仕「し」けん義遠「よしとを」が矢「や」雁「かり」にあ

たらずして康重「やすしげ」が矢「や」は雁の射通「いとを」し

(1 7ウ)

てかつはと地にぞ落にけり不破「は」万左衛門
すぐ様射「い」とりし雁「かり」を取て忠輝「たゞてる」公に奉
れば佐々木内膳「ないぜん」はめんぼくをうしなひ
赤面「せきめん」してぞひかへける不破万左衛門打笑「わら」
ふて古への揚由「やうゆう」は夜「よる」雁「かり」の声を聞ても
射ておとしたりと聞「きけ」り何条昼飛「とぶ」雁「かり」
を射ておとしたりとてあながちに功「こう」と
するにあらずと言下「ごんか」に義遠「よしとを」を恥「はぢ」し
めける忠輝公大に賞「しやう」し給ひ日比たし

(1 8オ)

なむ射藝「しやげい」のほど感「かん」ずるに絶「たへ」たりと
しきりに不破「は」を賞美「しやうび」し給ひ且又
佐々木内膳を呼で大にいかり給ひ汝無
用の大言「たいげん」をはなち雁「かり」を射「い」そんじあながち
恥辱「ちじよく」とも思「おも」はずさしひかへし体の奇怪「きくかい」さ
よ是より我目通りに出る事あたふま
し汝ごときの者は家中のみせしめ思ひ
しれやとてみづから扇「あふぎ」を取ててうちやく
し給ひ此席「せき」に叶わじと狩場「かりば」より追「おい」

(1 8ウ)

帰されける内膳は日比「ひごろ」覚へし弓矢の
達人「たつじん」ゆへよもや射「い」そんずる事はあらじと思
ひの外雁「かり」を射そんじ不破「は」にてうろう
せられ殿「どの」には諸士の中にててうちやく
せられむねん骨髓「こつずい」に(通)り今は切腹「せつぷく」せ
んにはしかじと思ひきはめて我家に帰
りけりさて又徳川忠輝「たゞてる」公は日の夕陽「せきやう」
にかたふくまで鷹「たか」をつかふてあそび給
ひ其後御帰城なされける佐々木内膳

(1 9オ)

我家に帰ると其まゝ仏間「ぶつま」に入短刀「たんとう」
をもち先祖の霊「れい」をまつり腹「はら」をくつろ
げ唱名「せうめう」して合掌「がっしやう」して申けるは拙「つたな」く
も義遠「よしとを」武門の家に生れて数度の

合戦にちじよくをとらず先鋒「せんほ」の士「し」に
くはへられいさゝか武功「ぶこう」のほまれありし身
の今日ちじよくを蒙「かふむ」りなどか一家中に
面「おもて」をあらはし候はんや先祖への申訳「わけ」唯
今腹かきやぶり相果「はて」未来「みらい」にて先

(1 9ウ)

祖「そ」の親族「く」にたいめんしつまびらかに申
上候はんとて刀「かたな」を取出し既に腹「はら」につき
立「たて」んとす然るに一間より私のちじよく
に忠義をわすれ犬死「いぬじに」し給ふ事なかれ
と呼「よば」はる者あり義遠おどろき是を見
ればふすまをひらきて立出るは桃生「もゝふ」元「もと」
昌「まさ」とて義遠がほう友の医師「いし」也義遠
あざ笑「わら」ひ其元達のしるゝ事ならず日
比のほう友「ゆう」の信「しん」あらばいさぎよく我介錯「かいしやく」

(1 10オ)

せよかならず死「し」とぐむる事なかれ元「げん」
昌「しやう」申けるは我まつたく其元の生害「しやうがい」を
とぐむるにあらず尋ぬる事有しばらく
生害をとぐまり我いふ事を聞へし食「しよく」
を喰「くら」ふものは其器「き」を損「そん」せずといふ
事あり汝今まで主君の禄「ろく」を受けて
一命をつなぐは主君何の為にやしなふ
ぞや合戦の時に敵をふせぎ敵「てき」を
やぶらん為ならずや何条「なんどう」いさゝかの事

(1 10ウ)

をいかりて一命をうしなはゞ何を以て
主人の為に敵をやぶり敵をふせぐ命
はいづれの体「たい」を以ていたすぞや此義を
我にこたへてのち死しても今忠義に
なるといふ事あらばいかにも切腹せよ我
もほう友「ゆう」のよしみに介錯「かいしやく」いたしくれんと
申ければ内膳「ないぜん」是を聞て汝がいふ事
一理ありといひながら死「し」すべき時に死せ
ざれば死にまさる恥「はじ」多「おほ」く殿「との」の御てう

(1 11オ)

ちやくは尤なれとも不破「は」が我をかるしめ
揚由「やうゆう」が雁「かり」を射「い」しは夜「よる」声「こへ」をきゝねらひ
てさへ射おとしたり何条昼「ひる」の雁「かり」を
射たりとて奇「き」也とせしとは我を盲人「もうじん」
同前にかろしめし一言「ごん」何と生て居らるべ
き元昌「げんしやう」手を打て大にわらひ汝今
殿「との」のてうちやくは尤といへば是罪「つみ」に伏「ふく」し
たる所あり公不破が悪言「あくごん」をいきどふる
とみへたり是私のいかりにして忠義

(1 11ウ)

の理いづれにありや信「しん」たる者忠「ちう」に死
し子たる者孝「かう」に死するはみちなれ
ども人に嘲哂「てうろう」せられし事をいかり腹「はら」
切「きつ」て死なんとは大成たわけとやいはん
一向「いつかう」死にたらざる不覺「かく」者也汝不破が
いふ事をさほどいかるならはいよ／＼武術「ぶしゆつ」
に心をいれ戦場において人にすぐれ
敵の首「くび」を取武勇のほどをあらはし
なば一つの忠義と成二つには此たびの

(1 12オ)

ぢじよくをすゝぐ本元「ほんげん」也今犬死「いぬじ」にする
命を保「たも」ちて君の馬前「ばせん」にて高名せよ
死したりとて今人汝が死を感「かん」ぜんや
と理をつくして申ければ佐々木内膳
はじめてさとり刀「かたな」をなげすて元昌「げんしやう」を
拜「はい」し其元のおしへにあらすんは我すでに
忠をやぶるべきによくも日比の志「こころ」ざしを
わすれずして我に忠をすゝめられけ
るこそうれしけれとなみだをながし

(1 12ウ)

てよろこび夫より酒などを出し元昌
がいさめによつて死をとゞまりて我と
恥「はぢ」をしのぎむねんをこらへて暮「くら」しけるが
是よりは病氣と□ちししばらく出仕「しゆつし」を
とゞまりけるしかるに佐々木内膳は舅「しうと」河「かは」
越「こへ」源太夫方へ夜咄「よはな」しにいたり帰りける
が不破万左衛門表を通りけるに何やら

ん五六人のこゑにて打わらふをふと佐々木といふ声「こへ」きこへければ何事をか

(1 13才)

いふやらんとひそかに軒「のき」に立より耳「み」をすまして聞に万左衛門が声「こへ」として佐々木

内膳狩場「かりば」にて弓「ゆみ」をかやうになし矢を

取てかやうに放「はな」ちたるに雁「かり」はさて置矢「や」は

それで行方をしらずなどゝあるひは

さま／＼の虚言「きよこん」をまじへて雑談「ぞうたん」仕方「しかた」

咄しをなし大勢大に笑「わら」ふ体内膳思

はず刀「かたな」の柄「つか」に手「て」をかけ門へ乱入「らんにう」せんと

おもひしが心に制「せい」して元昌我をいさ

(1 13ウ)

めしは爰「こゝ」也とむねんをこらへて我家「や」に

ぞ帰りける是よりいよ／＼佐々木内膳不

破「は」万左衛門をにくみ定「さだ」めて一家中さこそ

我を笑ふらめと唯「たゞ」あんしわづらひ暮「くら」

しける

曰く世俗「せぞく」に物種「ぐさ」太郎といふ浄留理「じやうるり」

の本書に不破万左衛門名古「なご」や山三「さんざ」

といふ兩人をのせたり是は関白「くわんぱく」秀「ひで」

次「つぐ」公の小性に不破万作名古や山三

(1 14才)

といふ美童「びどう」ありしかども文禄「ぶんろく」四年

高野山「かうやさん」にて秀次公と諸「もろ」ともに殉「じゆん」

死「し」せりしかるを作者「さくしや」物ぐさ太郎に

くわへて用ひたりとみへたり

(1 14ウ)

【書き入れあり】

(1 15才)

物種太郎卷弐

一 物種「ぐさ」太郎利休「としやす」か事

并 不破万左衛門不覚「かく」の事

一 物種太郎芦屋「あしや」方へ打手の事

并 佐々木義遠「よしとを」金平を生捕「いけどる」事

(1 16才)

物種太郎卷二

一 物種太郎利休「としやす」か事

并 不破万左衛門不覚「かく」の事

爰に物種新左衛門利隆といふ者あり

元來武術「ぶじゆつ」に達「たつ」し文学にくらからず

忠誠「ちうせい」の生質「きしつ」なれば忠輝公の御心に

叶ひ一家中へ武術の師「し」とせり嫡子「ちやくし」太

郎利休「としやす」は父とは事かはりて武術

をきらひ殊に病身なれば幼少「ようせう」より

(1 16ウ)

いふまゝにそだてければ慈悲心「じひしん」徒「あた」となり

かへつて愚鈍「ぐどん」と成其かたち中々武門の

家に生「むま」れし人とはみへず一家中の若「わか」

侍「さむらひ」とも只太郎「とあなどり軽「かろ」しめ

なぶりものにしたしけるされ共いかるといふ

事なく唯たはけ者と成て暮「くら」しける

父新左衛門是を大になげきかなしみ

色々意見「いけん」折檻「せつかん」いたしけれ共何

をいふてもおろかなれば其かひなくすて

(1 17才)

そだてになし置「をき」けるがすでに慶長「けいちやう」元

年にあたつて物ぐさ廿才に成ければ

父のさし図「づ」にて元服「げんふく」いたさせけれ共

何分取るにたらざるうつけ者ゆへ出勤「しゆつきん」

いたさせなばいか成あやまりを仕「し」出さん

もはかり難しとていまだ部「へ」や住にて

居たりけるしかるに忠輝公かねて

利休「としやす」が事を聞およばせ給ひくるし

からす出勤いたさせよと再三「さいさん」仰られ

(1 17ウ)

ければ新左衛門も今はぜひなく太郎

を出勤いたさせけるにおもひの外殿「との」

の思召にかなひ昼夜ともはなし給

はず愚鈍「ぐどん」成をかへつて賞美「しやうび」し給
ひ太良をなぶりては一興「いつけう」となしわら
ひのたねと成ければいかさま物ぐさ
とはよき名乗とて御前の首尾「しゆび」よ
ければ新左衛門案「あん」に相違してよろこ
びけるすでに此年も暮て慶長二

(1 18才)

年の春越後の福井「ふくい」徳川秀康「ひでやす」
君まで使者をおくらす事有ける
に物種太郎此役めを蒙「かふむ」り同国福
井へ使者をつとめけるすでに福井に
も着しかば真「すぐ」さま登城いたしけるに
其さまあほうらしき男ゆへ一家中も
目引袖引かれこそかねて聞およふうつ
け者の物ぐさ太郎ならんとわらひそ
しけりけれども耳「みみ」にもかけず御前に

(1 18ウ)

伺公「しこう」せり秀康君にもかねて聞お
よばれ給ひし事なれば御前ちかく招「まね」
き給ひ使者の口上を聞せ給ふに太良
少しも臆「おく」する体なくつまびらかに言上
いたしける秀康公仰けるは聞にまさ
る物ぐさは利口「りこう」者也いでほうびとら
せんと前なる菓子「くわし」をあたへ給へば小「せう」
児「に」のごとく少しも遠慮「ゑんりよ」なく菓子を
つかみで打くらふ夫より御暇いとま給はり

(1 19才)

ければ近習「きんじゆ」十六七人玄関「げんくわん」までおくり
出る《御連枝の使者たるゆへなり》すでに玄関に至り
ければ物ぐさ太良袂「たもと」より巾着「きんちやく」を取
出しどなたも御苦勞「くらう」也とて錢一文
づゝあたへそれより与坂「よさか」へ帰りける跡「あと」に
て近習ども大にあきれさてくけし
からぬうつけかな且又我々を軽「かろ」しめ一
錢づゝあたへしは何事ぞやと此よしを
秀康公に言上いたしければ君笑「わら」は

(1 19ウ)

せ給ひ是正直の至り少しもへつらふ
心なし一銭にてもあたへしは物種「ぐさ」が誠
の心のなす所なれば黄金「わうこん」武具「ぶく」馬「ば」
具「ぐ」を心ならず人におくるは是世上「せじやう」
をかざりへつらふ也よくも汝等一銭を
受たりとかへつて笑談「せうたん」し給ひける扱
物種は立歸りいさいに忠輝公へ言
上いたしければ大にほめ給ひさてく
汝はあほうにはあらず大膽「たん」不敵「てき」の者

(1 20オ)

ぞかし我家中多「お」しといへども中々秀
康公の近習に一銭をあたへるほどの者
はなしよくも仕「し」たりとほめ給ひ是より
いよ／＼御前にて用ひらる爰に芦や
金平といふ者有二百石を領「りやう」しけるが
殿の御名を申立御城下の町家「てうか」にて
金子五百両借用いたし返済「へんさい」不埒「らち」
より事露頭「ろけん」して不破万左衛門殿「との」の御
上意をうけ給はり芦「あし」や金平方へ

(1 20ウ)

おもむき金平に対面し其方事
此度殿「との」の御名をかたり大金を借用「しやくよう」い
たす事すでに露頭「ろけん」せりよつて不破万
左衛門を以て其つみを糺「たゞ」さるゝいかゞそや
と申ければ芦や金平所詮「しよせん」のがれ
ぬ所とおもひけん心を決「けつ」して今は
何をかつゝみ申べきいかにも仰の通り
御城下にて大金を借用いたしたり
しかれともかく露頭いたす上は殿「との」への

(1 21オ)

申訳「わけ」只今切腹「せつぷく」いたし(相)果「はて」候と刀を
ぬくぞとみへしが不破がふたんを見済「みすま」し
肩先「かたさき」へ切付たり万左衛門大に仰天「げうてん」し
足にまかせて一「いつ」さんに朱「あけ」にそみてかけ
出る金平は血「ち」まなこに成て追来る
此時不破と同役を受し赤坂多門「たもん」し

刀「かたな」をぬいて金平に切てかゝりたゝかひ
しが大「おゝ」げさに切はなされて死「しゝ」たり方
左衛門是を見てふるひわなゝき城中

(1 21ウ)

へ逃帰り此よしを殿「との」へ言上いしける忠
輝公不破には保養「ほうやう」仰付られにくき
芦や金平がふるまひかな此上は誰「たれ」
をか打手「うつて」に遣はさんと御心をくるしめ
給ひ何分取逃「にが」す事なかれと芦「あし」
屋「や」がやしきを十重廿重「とへはたへ」にかこませ
給ひ打手をこそは義せられけれ共
一家中「かちう」に誰有てのぞむ所なれ共
もし手にあまる時はちじよく也と顔「かほ」を

(1 22オ)

見合せてひかへたり

物種太郎芦やが方へ打手の事

并 佐々木義遠「よしとを」金平を生捕「いけどる」事
さても芦や金平は所詮「しよせん」のがれぬ所と
かくごをきはめ使者赤坂多門「たもん」をころ
し是より死物「しもの」くるひと玄関「げんくはん」に立
はたかり肌「はだ」にはくさり帷子「かたびら」に鉢「はち」まきた
すき身軽「かる」になし三尺一寸の太刀を
ぬき持打手来らはみなごろしとなし

(1 22ウ)

冥途「めいど」の供に召つれんと今やおそしと
まち居たり城内にはいろ／＼評議有て
誰「たれ」をかなと仰せられけるに物種「ものぐさ」太郎
すゝみ出某願「ねが」はくば此打手に参るべし
と申ければ殿「との」をはじめ并居「なみい」る諸士
大にあきれわらはぬ者はなかりけり忠「たゞ」
輝「てる」公仰られけるはさて／＼よくも打
手をのぞみつれども中々汝打手
にむかひなば金平に切ころさるゝは眼「がん」

(1 23オ)

前「ぜん」也此役は余人「よじん」にゆづるべし其方は
又相應「さうおう」の役目を申付る也かならず／＼

身に應ぜぬ事をなし一命「めい」をうし
なひ人もほめざる事をいたすべからず
との給へば物ぐさ申けるは何条「なんでも」いか程
の事あるべきや太郎参り金平を
いましめ御前へ引すへ御目にかけて候はん
をの／＼は芦「あし」やおそれ給へ共我等
は薰人形「わらにんぎやう」をみる如く少しも恐「おそ」るゝ

(1 23ウ)

心なしとて此打手をのぞみて打向
ふにさして衣類「いるい」もあらためず上下着「き」
なから城内を立出る不敵「てき」といふも余「あま」
りあり城内の諸士是を見て物種
かやうの敵「てき」をおそれず打むかひしこそ
やすからね日来「ひごろ」はたはけよ安房「あほう」よと
わらひものになしながら其あほうに
先をこされ物ぐさに金平を生「いけ」
どらせては我々がちじよく成べしいざや

(1 24オ)

来れ金平を生どりにして物ぐさに
鼻「はな」明せよと丸橋弥十郎根来「ねごろ」団次
関「せき」市弥等究竟「くつけう」の若者共我もく
と三十余人金平が方へそむかひけ
るさて又物種は城内を立出唯「たゞ」一人
高声「かうしやう」によばり／＼芦「あし」や金平
が打手として物ぐさ一人むかふ也と家「か」
中「ちゆう」のやしきをふれあるきそれより
我家へ帰り上下を解「とき」寝「ね」とする

(1 24ウ)

新左衛門夫婦「ふうふ」もろとも此やうすを聞
て其方は芦「あし」や金平が打手と受
ながら何ゆへに寝「ね」とはするぞや物
ぐさ申は我等か一寝入「ねいり」いたす間に金
平を生「いけ」どるへし少しも心にうけ給ふ
などよこに成しが高いびき螺「ほら」のごと
く前後もしらず寝入ける新左衛門夫「ふう」
婦「ふ」もてあましいかにあほうなればとて
一向「いつかう」とるにたらず新左衛門ぜひなく金平

(1 25才)

が方へむかひけるに早諸士「しよし」丸橋根「ね」
来「ころ」関「せき」等をはじめとして三十人あまり金
平が方へ乱「みだ」れ入るに打手にむかひし
物種はみへず扱は宿「やど」もとにて身ごし
らへやいたしつらんよき暇「ひま」也芦やを生「いけ」
どり物ぐさにちじよくをあたへよと打
入みれば芦や金平太刀を真向「まつかう」にか
ざして電光「でんかう」のごとく打ふりもとより
手練「しゅれん」の達人「たつじん」なれば三十余人の打手

(1 25ウ)

を引受事ともせず秘術「ひじゆつ」をつくして
たゝかふにやは(ママ)はに三人切たをされて後「あと」
に残りし輩もあきれはてしよしあ
ぐんてみへにけり時に佐々木義遠「よしと」を「は
昨年狩場「かりば」のちじよくをわすれ難「がた」く
心をくだき何卒「とぞ」して此ちじよくを
すゝがんとおもひ暮「くら」しけるに今芦「あし」や
金平殿「どの」の御名「な」をかたり大金を借
用し返済不埒「らち」につき不破「は」万左衛門使

(1 26才)

者の役「やく」めにてつみを糺「たゞ」す所にあやま
つて金平に切られ逃「にげ」帰りしより打
手をさし向「むけ」給ふ由天のあたふる所也
我生「いけ」どつて日比の武術「ぶじゆつ」をみせんもの
と用意をなす所に物くさ太郎打手
の役めを受給はりしと一家中をふれ
まはりけるを聞て義遠「よしと」を「つくく」おもひ
けるはかねて芦や金平は一家中にて手「て」
覚「おぼ」へ有武術の達人「たつじん」中々物草ごと

(1 26ウ)

き小生とらるへき物にあらず然れ共
太郎やくめを受たれば某むかひ金
平を打にはあらず是人の功「こう」をうばふ
に似「に」たりいかにあほうなれどももとより
新左衛門は家中へ武藝「ぶげい」の師範「しはん」いたす

事なれば尤さこそあるへしとおもひ
けるに一家中の諸土物種に手がらを
させては常にあなどり軽「かる」んじける身
いかで済べきとてみな芦や方へむか

(1 27才)

ひしと聞いていか様かくこそあるへしと佐
々木義遠五百石を拝領「はいりやう」しながら
物種がむかふにふところ手「で」して安閑「あんかん」と
はして居られまじ我もむかはんと櫪「かし」の
木六尺あまりの棒「ぼう」をよこたへ腰「こし」には
取縄「なわ」引さけて只一人金平か方へ向
ひしにはや四五人切たをされみなく
あぐみたる体なればよき折也とすみ
出佐々木義遠加勢申さんみな退「のき」

(1 27ウ)

給へと櫪「かし」の棒を打ふつてかゝれは金平
太刀を以て切はらひく秘術「ひじゆつ」を尽「つく」し
てたゝかへとも佐々木は聞ゆる棒の達「たつ」
人「じん」なれば終に芦やが刀「かたな」を打おと
しさんく「にたゝきふせ生捕ける夫
より奥へ乱入「らんに入」しけるに金平が家
内男女廿余人みなどもに生「いけ」どり一息「いき」
継「つぎ」ける折から物ぐさは目をすりく「此
所へ出来りさてく「をのく御くろう千

(1 28才)

万金平はいかに生どられしやと尋ね
ける丸橋根来「ねころ」物ぐさをとがめて申やう
其元は何ゆへ打手の役義を受なから
今まで遅参「ちさん」いたされしやといかり
ければ物種かぎりなく打わらひ我等は
打手の役目は受たれども宿「やど」もとに
て寝入「ねいり」たり又打手にむかい切ころさ
れなどせんよりは寝「ね」るは甚はだ心能「よき」
もの也と申金平にころされし人々

(1 28ウ)

をみて斯なん

よの中に寝「ね」るほど楽「らく」はなき物を
しらぬたはけが起「おき」てはたらく
と詠「ゑい」じければみな人大にわらひ常々
人にたはけにせられし太良が今日は
人をたはけに仕「し」たりと打つれ御前
へ出此よしをあからささまに言上しけれ
ば忠輝公かんじ給ひ物ぐさはさてく
惣明「そうめい」なる者ぞかし我役「やく」めを受けて諸

(1 29才)

士をはげまし生どらせ此大事の役め
を受ながら我家にて寝「ね」たりとは扱
く不敵「てき」の生根「しやうね」かなおいしいかな多病「たびやう」
愚味「ぐまい」にして人にかろしめられ一生を
おくらんこそおしむべしそれに人并「なみ」の
勇氣あらは天晴「あつはれ」人に優「すぐ」るゝ武士
成べきに柔弱「にうじやく」なる生得「しやうとく」こそぜひな
けれど大にかんじ給ひ百石の所領「しよりやう」
をあたへられけるこそ有かたけれ

(1 30才)

物種太郎第三

一 不破万左衛門物種「ぐさ」をあざむく事

并 佐々木義遠「よしとを」勇氣「ゆうき」の事

一 忠輝公関ヶ原「せきがはら」出陣の事

并 不破悪計「あくけい」百性一揆「いつき」の事

(1 31才)

物種太郎第三

不破万左衛門物種をあざむく事

并 佐々木義遠「よしとを」勇氣の事

扱も芦や金平非道「ひどう」によつてつみ
を糺「たゞ」されける所に不破万左衛門に手「て」
きずを負「おふ」せけるより大にさうどうしける
所物ぐさ愚案「ぐあん」ながら頓知「とんち」を以て諸
士金平方へ乱入「らんに入」しさつそく金平を
生どりければ忠輝「たゞてる」公大に物種を称「せう」

(1 31ウ)

美し給ひ百石所領「しよりやう」をあたへられ且又
去年より佐々木義遠は出仕「しゆつし」をとゞ
まり居たりしを是より出仕をゆるし
金平を生「いけ」どりしほうびとして時服「じふく」
一重「かさね」給はりければ日来「ひごろ」のちじよく愁「しう」
眉「び」をひらきいさみよろこび義遠「よしとを」有
がたく御前を退出いたしければそれ
よりしていよ／＼一家中物ぐさを侮「あなど」
る者こそなかりけりかくて不破万左衛門

(1 32オ)

はおもはずも芦やにあさむかれ不覺
の痛手「いたて」をおひければむねんにおもひ
殊に日比あざけりわらひし義遠「よしとを」に
手がらををせられ且「かつ」又物種がはたらき
かた／＼妬「ねた」みいきどふりける疵「きず」も次第
に平愈「へいゆ」しける折から物種太郎不破
が表を通りけるをよび入常重「つねしげ」
あざわらふて申けるはさて／＼其元は
父に似「に」てはつめいといひ勇氣「ゆうき」さこそ

(1 32ウ)

かんじ入たりいかに物ぐさ殿其元には
化物「ばけもの」を見とゞけ給ひしやと思ひがけ
なく申ける太良何心なくいかにも化「ばけ」
物「もの」はかやうのおそろしきにもせよつゝに
おそれたる事なしと口より出次第に
申ければさほどばけ物をおそれ給は
ずばこよひ四つ時我方へ来られよおそ
ろしきばけ物をみせ申さんかならず
おどろき給ふな太良打わらひいかにも

(1 33オ)

のちほど参るへしかならずはけ物を
みせ給へとやくそくして帰りける庸重「つねしげ」
は太良をあざむき帰しかの者大膽「たん」也
といふは只阿房「あほう」にして恥「はじ」をしらざる
ゆへ心のまゝに行ふ也誠の大膽不敵「てき」
か今宵かれをためし臆病「をくびやう」ならば

わらはん物と藁人形「わらにんぎやう」をこしらへ面「めん」を着「き」せて用意し暮るをおそしと待
にけるいまだ日「ひ」も西山「せいざん」にかたふかざるに

(1 33ウ)

早物種出来りいかに伯父「をぢ」殿ばけ物見
せ給へとのぞみける不破さてこそいま
だばけ物をしらするゆへかやうにのぞむ
こそおかしけいで肝「きも」をつぶさせて見
せんずと我方にもてなし置既「すで」に其
夜の四つ時にも成ければいかに物種殿
まつたくばけ物と申ものかやうの座し
きへ来る物ならずてうちんをとぼして
我やしきのうしろへ回「まわ」り給ひ二三度「ど」

(1 34オ)

行かよひし給はゞかならず狸「たぬき」が化「ばけ」出る
也とくと見届「とど」け給へといひければ太
郎おどろき我等終に夜「よる」一人出たる事
なし其元も同道「どうぐ」ならはいかにも参るへ
しさなくばけ物より傍「あた」りがおそろしく
候と面「おもて」をかへてこたへけるさてこそと不
破申やう我等同道いたしては其元の手「て」
がらにならす何分其元一人参り其
ばけ物を仕「し」とめ給へとすゝめける物艸「ぐさ」

(1 34ウ)

辞退「じたい」するといへどもゆるさねば力「ちから」なく不
破がやしきの裏「うら」へまはりける此やしき
のうらは一めんの沼「ぬま」□□：(※汚損) ふかきみち
あれども行かよふ人すくなし物種太良
は是迄夜あるきせし事なければ
ふるひ／＼うらみちへまはりけるか心にお
もふやういやばけ物といふを終「つい」に見
たる事はなけれ共さして益「ゑき」なき物
なるべし見ておそろしき目にあわんより

(1 35オ)

是より帰るにしかしとしあんして足
にまかせて逃帰りける此時常重「つねしげ」は

かの藁「わら」人形を松の木のの上に置繩「なわ」にてつりさげるやうにこしらへ下人に申
付太良が通る足音「あしをと」を相図「あいづ」につり下る用意して待「まつ」所にしばらくしても
太良来らず不思議「しぎ」と耳「みゝ」をかたふけまつ所に佐々木義遠夜咄しの帰る
さ不破がやしきのうら通「どぶ」りを来「き」かゝ

(1 35ウ)

りける此足音を太良と心得松にかけ
たるかのばけ物をおもひかけなくつり下「をろ」しければさしもの義遠大に仰天「げうてん」して飛「とび」しさり伺「うかゞ」ふに松の上よりつりさげける繩「なわ」みへけるゆへさては常重
我に不覚「かく」をとらせんが為歸りを待「まち」受「うけ」かやうの物をこしらへあざむくと見へたりにくさも憎「にく」しと飛かゝりかの藁「わら」人形「にんげう」を引つかんでさし通「とぶ」し繩「なわ」をも

(1 36オ)

引切て我家「わがや」にこそは歸りける不破庸「つね」重「しげ」は斯「かく」ともしらずうかゞふ所に松よりさげたる繩は切「きれ」ておちければあやしくおもひ家来を以て尋ねさせけるに化「ばけ」物「もの」も太良も居ざる由を告「つげ」ければ万左衛門大に仰天「げうてん」しさてこそ物ぐさはうつけ者とおもひしに誠に不敵のくせ者おそろしきやつ也と舌「した」をふるはしあきれる其翌朝「よくてう」佐々木義

(1 36ウ)

遠かのわら人形「にんぎやう」を御前へ持出申上けるは不破万左衛門かやうの物をこしらへ往来「わうらい」の者をなやまし候所思はず夜前某通「とぶ」り合せ取て歸り候也扱／＼不埒「らち」千万也と言上しければ物種是をみて大におどろき是は昨日「きのふ」我等にかやう／＼申て夜前ばけ物を見に来れと申されしゆへいか成者をと参りしが見ておそろしき物なれば益「多き」なしと思

(1 37才)

ひすぐさま逃歸りたり昼「ひる」みてもおそろしき是を夜「よる」見なばいか斗りおそろしからんとふるひけるもおかしけれ忠輝「たゞてる」公大にいきり給ひにくき不破がふるまひかな愚「をろか」成物種をあざむきなぶりけるこそやすからねいそぎ其つみを糺「たゞ」せよと急「きう」に召給ひ此義御尋ね有けるにまつたく下人のわざにて毛頭「もうとう」覺なしと陳「ちん」じけれどもあたはず終につみに

(1 37ウ)

ふくしける三百石の所領「しよりやう」を弐百石召上られ百石になされける万左衛門心中大にいきりさてくき物種がふるまひといひ佐々木義遠「よしとを」御前のちじよくを根「ね」にもつて我にかやうのなんぎをいたさせけるこそ心外「しんぐわい」也此上は百石の知行「ちぎやう」を召上らるゝとも佐々木義遠を打はたして我うらみを散「さん」ぜん物と内心に義遠をうらみけるこそおろか也

(1 38才)

忠輝公関「せき」ヶ原出陣の事

并 不破悪斗「あくけい」百性一揆「いつき」の事

かくて慶長「けいちやう」五年の比に至りて石田治部「ちぶ」少輔三成「みつなり」濃州「じやうしう」関が原に出陣し上杉景勝「かげかつ」は奥州「おうしう」会津「あいづ」より逆心「げきしん」をおこしければ徳川深君は宇津「うつ」の宮より福島正則「まさのり」加藤義明「よしあきら」平野遠江守黒田甲斐守真田隠岐「をき」守等をはじめとして三万五千よきにて打

(1 38ウ)

てのぼり給ふよし越後の与坂「よさか」へ聞へければ忠輝公は父君に力「ちから」をそへんとともに出陣し給ふ御ともに米倉民部「よねくらみんぶ」嶋川一学「いつかく」物種新左衛門をはじめとして八

千五百よきにて関か原の陣に加「くは」はり
給ふ然るに不破万左衛門は病氣といつ
はり御供に至らずして本国に残り
ける爰に佐々木義遠は此度の先「せん」
陣「ぢん」をのぞみけれども君ゆるし給はず

(1 39才)

汝は本国に残り城を大切「たいせつ」に守るべし
ととどめ給ひけるゆへ義遠ぜひなく
嫡子「ちやくし」甚蔵を君の御ともさせ其身は
本国に残りける扱も不破常重「つねしげ」此度
病氣といつわり本国にとまりしは
是義遠を害「がい」せんか為の謀斗「ぼうけい」也此時
の兵糧「ひやうらう」奉行は河越「かはこへ」源太夫也義遠が
為には舅「しゅう」なるがゆへにともに心をそへ
□切「たいせつ」に兵糧をおくりける爰に三嶋「みしま」

(1 39ウ)

郡「こほり」中瀬「なかせ」とて三千石の領内「りやうない」毎年不「ふ」
作「さく」いたし年貢「ねんぐ」不参「さん」しければ義遠此
度の事なればきつと糾明「きうめい」せん物とて
中瀬の庄や十余人よび出し申けるは
此度関「せき」が原軍用「ぐんよう」に付て兵糧とぼ
しく中瀬事毎年不作の由申上
年貢不足いたす所なれば此度は汝
等もめいわくに思はんなれ共爰三日
のうち千俵の年貢「ねんぐ」を調進「てうしん」いた

(1 40才)

すべし若此度遅滞「ちたい」せば是迄の不足「そく」
御取立也と申渡しける庄やとも大に
おどろき村々に立帰りやう／＼三日の中「うち」
に米をととのへけるに五百俵には過ず是
にてはいかゞせんと中瀬郷「なかせがう」の百姓大に困「こん」
窮「きう」難渋「なんじう」しける不破万左衛門此時をうか
がひ時節到来せしと流言「りうげん」を以て中
瀬に至り我と同じき友「とも」をかたらひ
いはせけるは此度の兵糧米調進「てうしん」の義

(1 40ウ)

はまつたく殿「との」より仰出されしにはあらず
佐々木義遠私を以て民に申付たる

所也といろ／＼といはせければ百性ども大
におどろき扱は佐々木が私欲「しよく」の為我
々をくるしめる所也と我身のつらきより

百性ども悪心をおこし三日の日限「にちげん」切れ
しかとも兵糧米いまだとゝのはず迎「とても」

我々がつみ窮「きはま」りたる事なれば幸「さいは」ひ

殿「との」は関「せき」が原の戦場「せんじやう」へむかはせ給ひし跡「あと」

(1 41才)

は空城「くうじやう」也我々三千石の領内の百性徒「と」

党「とう」して一揆「いつき」をおこし与坂へせめよせ城

をせめおとし三日にても栄花「ゑいくわ」をきはめ

是を此世「よ」のおもひ出に打死せんにはし

かじと無念無想「むそう」の悪事をおこしける

一人発言「ほつごん」しければいか様此義しかるへし

と傍若無人「ぼうじやくぶしん」の百性どもさいはひあつめし

兵糧を以て我も／＼と中瀬にあつまり

一揆「き」二千余人いざや城中へせめよせんい

(1 41ウ)

きほひをなしにける乱世「らんせい」のみぎりと

いひ殊に百性の一揆きこへければ城下

のそうどういはんかたなく我も／＼と甲「かつ」

冑「ちゆう」にて城中へあつまりよするを今やと

まちにける佐々木義遠「よしとを」申けるは全「まつた」く

是三日の中に兵糧米調進「てうしん」いたすべ

きむね申付たるによつてかゝるらうぜき

のふるまひをなす物ならんしかれとも乱「らん」

世「せい」の事なれば是式「しき」の一揆は少しも

(1 42才)

おそるゝにたらねとも是を見ならひ

国中の百性ともよき事におもひて一「いつ」

揆「き」おこさんも斗りがたし然る時は城中へ

引受ては叶ふまし此一揆をなだめ兎「と」

角「かく」しづむるにはしかじと佐々木義遠

わづかに手勢五六騎「き」にて中瀬「なかせ」にぞ

至りける不破万左衛門大によるこび義

遠を打はたすは此時也とすかたをや
つし鉄砲「てつほう」をたづさへ跡「あと」をしたひ見へ

(1 42ウ)

かくれにうかゞひける我つみを一揆「いつき」
にゆづらん為のふかき謀斗「ほうけい」也とこそ
しられけり

(2 1才)

物草太郎第四

一 さゝ木義遠「よしとを」一揆「いつき」を鎮「しつむ」る事

并 不破鉄砲「てつほう」にて義遠を打事

一 一揆の百性四人死刑「しけい」の事

并 中瀬「せ」村助六孝心「かうしん」の事

(2 2才)

物草太良第四

佐々木義遠一揆「いつき」を鎮「しつむ」る事

并 不破鉄砲「てつほう」にて義遠をうつ事

己「をのれ」か身を立「たて」んとして人を害「がい」し又我身
をめつする者にしへより其数をしらすと

かや不破万左衛門はいらざる人をあざむき

かへつてちじよくを受いかりをおこし佐々

木義遠「よしとを」を打んとはかりけるまつ中瀬「せ」
に一揆「いつき」をくはだてさせ百性をかたらひ

(2 2ウ)

けるに折「をり」ふし殿「との」には関か原出陣の留「る」

守「す」中ゆへ城中大にそうどうし且元より

うれいをおこしける今や一揆「いつき」のよするかと

みな武器してひかへしに佐々木義遠

申けるは何分かやうに乱国「らんこく」の事なれば

某かの村に立こへ百性に利害「りかい」を説「とき」

しづめん候はんましいに城下にせめよせ

させなば国中の百性是を見ならひ

一揆おこるまじきにもあらずと手勢

(2 3才)

六七騎「き」にて中瀬に立こへける不破
万左衛門よき時節到来と其身は百
性の一揆「いつき」にまじはり鉄砲よこたへ義「よし」
遠「とを」の来るをおそしとまちみたる義
遠はかくともしらす中瀬にいたり見渡「みわた」
せば百性一揆二千余人竹鎗鋤鎌「すきくはかま」
棒「ぼう」に至るまで得物「／＼」を打かたけ今
ぞ城中へおしよすべきけしきにて時の
こへをつくり螺「ほら」をふき立たいこを打

(2 3ウ)

てさもおびたしくみへにけり義遠
馬上ながら申やういかに一揆の者ともまづ
しづまつてうけ給はれ汝等殿「どの」の命に
そむき兵糧「ひやうらう」をととのへざるのみならず
かへつて乱「らん」をおこすは何事ぞやしか
れともいまだ四海「しかい」おさまらすよつて此度
のつみをゆるし汝等ととのへたるほどの兵「ひやう」
糧米「らうまい」にて当時御慈悲「じひ」を以て是を
ゆるす也然るに乱をおこし国をさはが

(2 4才)

すやいかに／＼と申ける一揆の者共大
におどろきかくあり難「がた」き仰なれは何「なん」ぞ
命がけの一揆をおこすべき命をこそおしけ
れとおもひければ庄やのめん／＼罷出尤
なる上の仰かくある事に候はゞ何ゆへ一揆「いつき」
をなし候はん然れはたゞ今ととのひ有程
の兵糧米「ひやうらうまい」五百俵にて御免「めん」下さるや然
らば乱「らん」をしづめ引しりぞき候はんと伺「うかゞ」ひ
ける義遠申はいかにも其兵糧米を城

(2 4ウ)

下にはこび一揆を引しりぞき候へと申
ける仁者に敵なし愚智文盲「ぐちもんもう」の百姓
なれとも義遠が一言に乱をおさめ我
も／＼と引しりぞきけるほどに義遠は
早々城内へ帰り安堵「あんど」させんと馬をはや
め立帰る所にいづくともなく鉄砲の音「を」とひ

びきて義遠が胸板「むないた」をつらぬきける何
かは以てたまるへき馬より逆様「さかさま」におちて
死たり郎等「らうどう」家来大におとろきさはぎ

(2 5才)

立にくき百性等がふるまいかなとろうた
へまはり煙「けふり」の立しはかの森「もり」也と爰には
しりかしこをたづねけれども打たる打手
はしれず涙「なみだ」ながら主人の死「し」がいを馬に
のせ城中へ立帰り此旨を言上しければ
城内の留主居矢野「やの」内匠「たくみ」さては一揆
の中より先「さき」へまはり義遠が帰りをまち
ふせかくなせしものならん不便「びん」や義遠
は一国の乱「らん」をなげき慈悲「じひ」を以て一揆

(2 5ウ)

をしづむるに愚智無智「ぐちむち」の百性原
義遠か詞をいつはりと思ひだまし打に
しけるこそ安からね此上は矢野内匠「やのたくみ」「いつ」
揆「き」のやつ原一人も残さず打ころし義遠
がとふらひ軍「いくさ」なさずんは有へからずにく
き百性の一揆かなと大にいかりすぐさま
武具を着「ちやく」し用意しける所へ中瀬
の大庄や岩之進をはじめ其村の庄「しやう」
やのめんく十六人我もくと城下へ来り

(2 6才)

此度のつみ御めん下さる条「でう」有がたし
とて御礼の為来りしと城内へ申入れ
は矢野内匠「たくみ」さいはひとみな城中へ招「まね」き
入一人も残さず高手「たかて」小手「こて」にいましめけ
る庄やのめんく大におどろき扱ははかり
事にのせられしとたがいにかほを見合
せてあきれける矢野「やの」内匠庄や共を
よび出し大にいかり申しけるは汝等此たび
兵糧米を調達「てうだつ」の日限 延引「ゑんいん」し其

(2 6ウ)

うへ一揆をおこし今殿「との」の御留守を
かんがへ城中小勢也とあなどり城下へ

おしよせんとはだてけるこそにくき重「ぢう」
罪人「ざいにん」一人も残さず穴「あな」にうづみころすへ
きものなるを佐々木義遠が仁心を
を以て其罪をゆるし乱国「らんこく」の事為
いかやうの陣事「ちんじ」出来せんもはかりがたしと
慈悲「じひ」を以て一揆をしづめる所一旦「いつたん」は
一揆をしづむるといつはりかへつて飛道「とびどう」

(2 7才)

具「ぐ」を以て義遠を打とり其つみを
覆「おほ」はんが為に御礼にのぼりしとは不敵
のふるまひ獄重「ごくちゆう」罪人「ざいにん」の汝等（逆）「さか」ばつゝ
けにかくる間かくごせよといかつて申け
れば百性どもあきれば何とこたへん
やうもなく只涙「なみだ」より外は出ざりける大
庄や岩之進やう／＼有て申けるは全「まつた」
く我々御上の御慈悲「しひ」をかんじ奉り早
々に一揆を制「せい」し引しりぞき候へども

(2 7ウ)

佐々木殿を鉄砲にて打たる事は
身に取て覚へなし此義はいくへにも
とくと御せんぎ下さるべしと言上しけれ
ば内匠「たくみ」いよ／＼いかりさこそあるへし通例「つうれい」
の事にては中々白状「はくじやう」いたすまじ先獄「こく」
中「ちゆう」に打こめよと十六人の庄や共を入「にう」
牢「らう」いたさせしはぜひもなき次第也扱
矢野「やの」内匠はまづ義遠が横死「わうし」を戦「せん」
場「じやう」へしらせ是よりは十六人の者どもを

(2 8才)

毎日／＼引出し拷問「がうもん」いたしけるこそふ
便「びん」也

一揆の百性四人うたがひを蒙「かふむ」り死刑「しけい」の事
并 中瀬村助六孝心「かうしん」の事

扱も不破万左衛門は日来「ひごろ」の大望「もう」成就「じやうゆ」し
難なく義遠を打ころし心中に笑「ゑみ」を
ふくみ且「かつ」又又我なしたるといふ事知「し」る者

なく只百性一揆のわざ也と心得十六人の者どもを毎日く拷問「がうもん」いたしける是

(2 8ウ)

を不便と思ふ心なくかへつておもしろき事におもひおのれが打ながら内匠「たくみ」

ともにきびしくせんぎいたしける剛悪「かうあく」

奸賊「かんぞく」とはいひなから天のとがめそおそろし

き大庄や岩之進申けるはかやうに拷「がう」

問「もん」にあふとはいへども十六人の者とも一向「いつかう」に

覚へなし是はさだめて其時鉄砲を

持たる者の所為「しよい」成へしと申に付内「たく」

匠「み」げにもと思ひ不破に下知しければ

(2 9オ)

常重心得いそぎ中瀬に至り一揆

の節てつほうを持たる者をせんぎし

けるにさつそくたづね出しけるに式百十

六人有是を残らすいましめ城中へ

帰り拷問「がうもん」しけれども義遠を打た

る者はなし内匠「たくみ」も此せんぎにはあぐみ

ける時に関が原の陣中には殿「との」忠輝

公百性の一揆義遠「よしとを」が打れし次第を

聞し召大にいからせ給ひ義遠倅「せがれ」甚

(2 9ウ)

蔵には父を打たるくせ者せんぎ

仰付られ陣中の御いとま給はりける

又百性一揆は物くさ新左衛門利隆「としたか」よ

ろしくしづむべき由仰付られ佐々

木甚蔵物くさ新左衛門兩人は戦場「せんじやう」

より本国へ帰りける扱も甚蔵は

父の横死「わうし」をなげき何とぞ父を打

たる百性を給はりなばかれを打て

父が存念「ぞんねん」をはらさんと申ける物

(2 10オ)

ぐさ新左衛門も内匠「たくみ」もろとも手づよく

拷問「がうもん」しけれともとかくしれさりければ

夫より新左衛門がはからひとして二百十六

丁の鉄砲を取よせ其日打たる者
をせんぎするにおどしの為に鉄砲「てつほう」を
打たる者三十余人也ければ残りの
者はつみをゆるし三十余人をせんぎす
るに一向「かう」しれず元來覚へなき者
なれば一言半句「はんく」もいひそく【くの上に貼紙】くれし

(2 10ウ)

者はうさん也とどめ置いひ訳「わけ」すゝ
しき者十六人又つみをゆるしける是
も又一向「いつかう」しらざる者どもなれば中に
て人相「にんさう」と云「いひ」常にふるまひあしき
者四人をゑらみ出し定めて此中
にぞあらんとて終には死刑「しけい」におこ
ひ獄門「ごくもん」にかけられしはぜひもなき
次第也佐々木甚蔵は父の敵は是
也といふ事をしらず四人が死刑「しけい」に

(2 11オ)

なりしを父の敵を打たりといふ
心にてすましけるは残念いはん方ぞ
なき是に引かへ不破「は」万左衛門は終「つい」に
我つみを百性にゆづり心のよろこび
いはんかたなし爰に上中瀬村助
六といふ者有孝心「かうしん」の者也しが
此たび父助右衛門一揆の中にて鉄「てつ」
砲「ほう」を持たるゆへゑらみ出され(もし)義「よし」
遠「とを」を打たるにやとうたがはれ死罪「しさい」

(2 11ウ)

に行はれ村のはつれにて獄門にかけ
られける助六大に嘆「なげ」きかなしみ我
父にかぎり人を打べき事はなけ
れども只此度の死刑「しけい」は無成敗「むせいばい」也
とひたすらに此事をなげきしが
父が死「し」はなげきてもかひなければ
何とぞ佐々木を打たる打手をさ
がし出し父が汚名「をめい」をすゝぎ度「たく」思
ひ当村の氏神「うじしん」八幡宮の森「もり」の神

(2 12才)

前に詣「もう」でいのりけるは死たる父は
ぜひなく佐々木を打たる科人「とがにん」を
しらしめ給へ然る時は人ころしのつみ
は消「きへ」候と丹誠「たんせい」をこらして祈誓「きせい」し
けれども且「かつ」以てしれず助六大に
うれひ神前にひれふし再度「ふたゝび」心「しん」
願「ぐはん」おこたりなくいのりける孝心の程「ほど」
ぞあはれ也と聞人涙「なみだ」をながしける

(2 13才)

物くさ太郎第五

- 一 百性助六玉薬「くすり」をひろふ事
- 并 不破陰謀「いんぼう」露頭「ろけん」ちくてんの事
- 一 物種新左衛門矢野内匠「たくみ」切腹の事
- 并 佐々木甚蔵敵討願「ねがい」の事

(2 14才)

物くさ太良第五

百性助六玉薬をひろふ事

并 不破陰謀「いんぼう」露頭「ろけん」逐天「ちくてん」の事

水を祈「いのり」父の仇「あだ」を報「ほう」し障子「せうじ」をいのりて君の敵を打たる事むかしより例「ため」し
有水は水神とて神なれば仇を報「ほう」ず
る加護「かご」有べき所なれども障子「せうじ」は家「か」具「ぐ」にして奇特「きどく」有へき物ならね共信「しん」ずる時は奇特をあらはしましてや助六

(2 14ウ)

信「しん」をこらせし所なればなどか神慮「しんりよ」に叶はざらんや助六は神前にて通夜「つうや」してなげき居たりしがため母の待
わび給はんと神拝「じんはい」おはりすごとくと森「もり」の下草ふみ分「わけ」て帰りけるが思はずも
此方をみてあれば人のかゞみし跡「あと」みへて茨「いばら」折敷草「くさ」たをれ何となく助六が目にきら付しがてつほうの玉薬入
おちて有ければ助六不審「しん」に思ひ草「くさ」

(2 15才)

を申し分是をひろひあやしき器「き」
物「ぶつ」のおちて有ける事よと取上みる
に金字「きんじ」にて不破常重「つねしげ」とほり付
たり助六おもひけるは是こそ神の加「か」
護「ご」にて科人「とがにん」の手がゝりならんと神前
を拝「はい」しうれしくも我家に帰りしが書「かき」
付「つけ」を見るに此度の一揆の中にかやう
の名字「めうじ」はきかずさては城内の佐々木
に意趣「いしゆ」侍「さむらひ」が一揆に事よせ平等「びやうどう」

(2 15ウ)

の森よりねらひ打たりと覺へたり
然るに百性一揆の折「をり」からゆへ口おしく
も我父をはじめ四人の者ども無実「むじつ」
のつみにしづみたり是を城中へ持行
せんぎをたのみなばさつそく知「し」れん
事は有ましと願書「ぐわんしよ」をしたゝめ懐「くわい」
中「ちゆう」し城下に至り町奉行穂田「ほた」下
野がやしきに行玉薬入をひろひ
申候然るに父此度つみなくして死「し」

(2 16才)

刑「けい」に行「おこな」はれたり其佐々木を打た
る罪人「つみんど」せんぎの手かゝりとも相成候は
んか且「かつ」又佐々木殿の打れ給ひし道「みち」は
平等「びやうどう」の森の右手なれば方々「あや
しく存候と言上しければ穂田「ほた」下
野申けるは一旦決断「けつだん」済し事再「ふた」
度「たび」是を糺「たゞす」は法度「はつと」なれとも其拾「ひろ」
ひたる玉薬入に不破常重と有
はまさしく城内の万左衛門か事なれ

(2 16ウ)

ばかの者私の意趣「いしゆ」になしたるも
はかられず吟味いたし得さすへしと
ありしかば助六大によるこびとかくよろ
しく願「ねが」ひ奉ると我村へ帰りける穂「ほ」
田「た」下野いそぎ登城「とじやう」し此器物「きぶつ」を

矢野「やの」内匠にみせ此度つみせられし
中瀬「せ」の助左衛門が倅「せがれ」助六と申者父の
死刑「しけい」をなげきかなしみ平等「びやうど」明神
へ祈誓「きせい」せし所に森「もり」の中にてひろ

(2 17才)

ひし由申出たり不破常重といふ
文字「もんじ」あればかならず万左衛門事成へし
と申ければ内匠「たくみ」大におどろきさだめて何
ぞやばけ物をこしらへ物種をあざむきし
に義遠に見とがめられ知行を召上ら
れたる事を根「ね」にもち一揆に事よせ打
たりと覚たりしかるに百性四人を死刑「しけい」
せし事なれば不破が所為「しよい」たりとあらは
るゝ時は我々か不吟味「ぎんみ」にて無成敗「むせいばい」と

(2 17ウ)

と成て殿「との」帰国のゝち大に御とがめを
受へし内分にて常重にたづねみんと
万左衛門をまねきひそかに玉葉入を出
し是みしり有やとたづねければ万左衛門
大に動「どう」し南無「なむ」三宝「ぼう」事露頭「ろけん」せし
と当惑「とうわく」せしが面「おもて」を正して申けるは誠
に先月殿「との」と中瀬へ小鷹狩「こたかがり」におも
むきし折から平等「びやうとう」の森にて取おと
し候が夫「それ」をかの百性がひろひ置此度

(2 18才)

彼「かれ」おやども死刑「しけい」に行はれしかなしさ
のあまり今ひろひしなと申上此方
左衛門を讒言「ざんげん」すると覺たりと我悪心「あくしん」
をおほはんと弁舌「べんせつ」にまかせ申ければ
内匠「たくみ」も我あやまりをかくさん為に常
重が申所を誠におもひ其まゝにて
濟「すま」しける万左衛門は佞弁「ねいべん」を以て其場「ば」
をいひまかしのがれしかともかく露頭「ろけん」せ
し上は佐々木が倅甚蔵此事を聞

(2 18ウ)

はさだめてむつかしく成やせんと後難「こうなん」

のほどをおそれ我やしきに帰ると其
まゝ取物もとりあへず路金「ろきん」の用意
してすぐ様逐天「ちくてん」いたしけるは残念也【也ミセケチ↓ナリ】
し次第也此事一家中のさたと成
ければ佐々木甚蔵大におどろき扱は
不破常重が所為「しよい」成かど齒「は」を
かんでくやみいかりかゝる事ともしらず
百性四人無実「むじつ」のつみに行「おこな」はれしを

(2 19才)

敵は打しとよろこびしが敵は目前「もくぜん」に
ありし事をしらざりし事の口おしけれ【けれミセケチ↓さよ】
と狂気「けうき」のこどく成て近在近国を
たづねしかども不破が有所「しよ」のしれさ
れば残念におもひ寝食「しんしよく」をわすれ
身をもがき體「からだ」をもんでいかりけれ共
せんかたなくそみへにけり

物種新左衛門矢野内匠「やのたくみ」切腹の事
并 佐々木甚蔵敵打願「ねがい」の事

(2 19ウ)

さるほどに不破万左衛門常重は与坂の
城下を立のき足にまかせて越後の国
糸魚「いとい」川に至りけるが此地は生国「しやうこく」なれ
ばもしやする人もあらんかと十日あまり身
をしのび夫「それ」より京都へと心さしけれ
ども関「せき」が原合戦最中なるゆへ浪人「らうにん」
は国郡「こくぐん」に關をすへ敵「てき」の間者「かんじや」かと
うたがひ自由に通「とふ」る事あたはず糸「いと」
魚「い」川の城下より五里「り」斗りへだて

(2 20才)

生駒「いこま」といふ村有此在所に以前召仕「めしつか」
ひし定九良といふ中間「ちうげん」の生国なるゆへ
此所に身をしのひしばらく逗留「とうりう」致
しけるしかるに關が原の合戦石田三「みつ」
成「なり」敗軍「はいぐん」して関東「くわんとう」の御勝利と成深君
にはすぐ様京都へ上洛「しやうらく」まし／＼ける忠
輝公も上洛有へき所なれとも本国
に一揆のそどう何か心元なくおもひ

(2 20ウ)

給ひ御父深君に御暇「いとま」を乞「こひ」給ひ関「せき」
が原よりすぐに本国へ帰陣「きちん」有「あり」けれ
は諸子「しよし」のめん／＼登城「とじやう」してかち軍「いくさ」を賀「が」し
奉る時に忠輝公仰出れたるは不便
なるは佐々木義遠が横死「わうし」いよ／＼百性
どもがなす所にやと御たつね有ければ
佐々木甚蔵訴状「そじやう」をさし出し申上げる
は父の敵は百性どもとおもひしにかやう
／＼の次第と一々申上敵不破は逐天「ちくてん」
いたし候へば何とぞ敵打の願「ねが」ひ御聞届「きんとどけ」

(2 21オ)

なし下し給ひなば是より諸国をめぐり
敵をたづね出し万左衛門を打て父の霊「れい」
をなぐさめ申度候と願ひければ忠輝
公おどろき給ひ義遠が横死「わうし」は一揆の
わざと聞つるに何ゆへ不破「は」が所為「しよい」なるぞ
と新左衛門内匠「たくみ」の兩人をめされ糺「たゞ」し給へ
は矢野「やの」内匠ぜひなく言上しけるは不破
万左衛門弁舌を以て某「それがし」をいつわり直「すぐ」様
逐天「ちくてん」いたし候とあからさまに申上げる

(2 21ウ)

殿「との」殊の外いかり給ひ汝に城中を預「あづ」
け置はかやうの善悪を糺「たゞ」すへき為「ため」也
然るに不破が悪事を糺すへき場所「ばしよ」
にては手ぬるくして取逃し百性のしら
ざる者どもはきびしくつみに行「おこな」ひ無実「むじつ」
のつみにに民をころしたる言語道断「こんごうだん」我
をかるしむるに似「に」たり物ぐさ新左衛門とても
我目代「もくだい」として国に帰りながら私に民
を害せし事かろからす兩人ともさだめ

(2 22オ)

て不破常重にまいないを受けて
おのれが利欲「りよく」にまよひける非道「ひどう」に組
せしものならんにくき汝等か心中と大
にいかり給ひければ矢野物種の兩人は

我あやまりにせんかたなく不破が謀悪「ぼうあく」
をたゞいきどふる斗也物種新左衛門は心
はやき者なれはいひ訳「わけ」の為に諸肌「もろはだ」
ぬぎ刀「かたな」をぬく手も見せはこそ腹「はら」に
つき立ければ矢野内匠もおくれじ

(2 22ウ)

とはじて切腹いたし兩人詞をそろへ
言上しけるは殿「と」の御帰陣をまたず
して百性をつみせしは以後百性に一
揆「き」をくはだてさせまじきが為の見せ
しめにして不破が悪事「あくじ」を存ぜざる
ゆへ也然るに常重にまいないをとり
百性をつみせしと仰らるゝ君の御
一言「ごん」に何とこたへん詞なく去「さる」によつて
兩人切腹して覺なき忠心をあらはし

(2 23オ)

候也少しも常重ひいきの所存これ
なく候へとも国乱「こくらん」をしづめん為早々百
性どもをつみせしは某等かあやまり也
此上はいかやうとも御推見「すいけん」下さるへしと切
腹しての申訳「わけ」に殿も不便「びん」に思召れ
それより下知をなし給ひ諸国へ絵「ゑ」
図「づ」を以て常重を吟味「ぎんみ」し給ふ殊に
佐々木甚蔵か敵打のねがひ尤に思
召さつそく御いとま仰付られければ甚

(2 23ウ)

蔵ありがたく御受申上溝口「みぞくち」岡平と
いふ若党「わかとう」一人供に召つれ敵不破を
打んと住「すみ」なれし与坂「よさか」を出立して
いづくをあてといふ事なく目さす敵
や不破「は」の関「せき」伊勢路「いせぢ」をさしてのぼり
ける爰にあはれ也けるは矢野「やの」内匠
物種新左衛門兩人也城内において切
腹して相はてければ兩人の妻子「さいし」の
なげき大かたならず然「しか」るに物ぐさ

(2 24オ)

太良はおろか成身のあはれさは父の
さいごときくよりも大に嘆「なげ」きかな
しみ子供童「わらんべ」のこたく足ずりして
昼夜袖「そで」のかはくひまなく何として
父上は此世「よ」を去「さり」給ひし事と母に
取付流泣「りうてい」しけるこそ道理也きく
人物ぐさか愚「おろか」にして父に分「わか」れ悲「かな」
しむを尤とおもひともに落涙「らくるい」いた
しけるとかや

(2 25才)

物種太郎第六

- 一 物ぐさ母義を守「まも」り自害「じかい」の事
并 物種太郎敵打を願「ねが」ふ事
- 一 忠輝公御仁心敵うち首途「かどて」の事
并 不破常重「つねしげ」福嶋へ奉公の事

(2 25ウ)

- 一 くさ物郎太かたきうたるゝ事
并 ちくくてん不働事

(2 26才)

物種太郎第六

- 一 物ぐさ母義を守「まも」り自害「じかい」の事
并 物種太良敵打を願「ねが」ふ事
人木石ならず信恩「しんおん」をしようと聖人「せいじん」もの
給へり尤成かな物ぐさ太良が父新左衛門
不破が悪斗「あくけい」によつて切腹「せつぷく」したる事を
なげきかなしみ暮しける君にも不便
に思召れ是迄の通「とふ」り太良は御前を
つとめさせ父の名跡「めいせき」を継「つが」せ五百石を

(2 26ウ)

下し給ひけるこそありがたき是より
太郎は毎日御前に出勤「しゆつきん」して今迄の如
く愛せられける爰に太郎が母は同家「か」
中「ちう」都倉「とくら」一学「かく」が妹にして太良三才の
時つれ子にて新左衛門方へ再縁「さいゑん」いたし
ければ新左衛門は継父「けいふ」也然るに正「まさ」しく
継父新左衛門は不破「は」が為にはかられ切

腹せし事なれば常重は父の敵也
殊に義理ある中の父の事なれば太

(2 27才)

郎ぜひとも敵打に出へき所なれ共
元来柔弱「にうじやく」にして多病「たびやう」の事ゆへ太刀
はおろか棒「ぼう」一本ふる事叶わず殊に敵打
といふ事は愚鈍「ぐとん」の太良ゆへ出へき所存「しよぞん」
もなく只愛「あい」せらるゝゆへに出勤「しゆつきん」をのみ
いたしける太良母是をなげきなさぬ
中の父ゆへ其子太郎敵も打す父の
名跡「めいせき」を相続「さうぞく」しよろこびみると人のそ
しり是みな母がなせる事よとうたが

(2 27ウ)

はれんもかなしく去なから物ぐさは柔「ふう」
弱「じやく」也いかゞせんと女氣「ぎ」に此事をおもひ
暮し何とかおもひ定「さだ」めけん一書「いつしよ」を残し
置太良出勤「しゆつきん」せし留守「るす」に仏間「ぶつま」にお
いて自害して打はてけるこそ貞節「ていせつ」也
家内大にそうどうして此由を太良に
しらせければ太良狂氣「けうき」のことく立帰
りみれば母は刃「やいば」につらぬき朱「あけ」にそみて
ふしたりこは何ゆへの御自害ぞと死「し」た

(2 28才)

る母に取付前後も弁「わきま」へず泣「なき」けるが漸「やうく」
に書置「かきをき」を取上泪「なみた」なからひらきみるに
書置の一通「つう」

一 其元殿事は三才の時母のつれ子
にて当家へ再縁「さいゑん」したる事なれば
父新左衛門殿には義理ある中然るに
継父新左衛門殿は不破「は」常重が奸計「かんけい」
にあたつて切腹し給へば敵打にも出
らるべき所なれとも元来「ぐはんらい」病身と

(2 28ウ)

いひ柔弱「にうじやく」なれば其事あたはず殿「との」
様より名跡「めいせき」相続「さうぞく」仰付られ当家
を継「つぎ」本領安堵せらるゝ事尤うれ

しく候へとも継父の敵なれば打に

およばすと母がよくに心くらみ柔弱「にうじやく」
をいひ立「たて」敵を打さぬはなさぬ中の

薄情「はくじやう」と人に思はれんかと母は夫「おつと」新
左衛門殿のあとをしたひ殉死「じゆんし」して相

はて申候まつたく夫「おつと」の敵を打せぬ母

(2 29才)

ならさる事を一家中の人々にしら

せぬ【ぬミセケチ↓ん】が為殉死「じゆんし」してあとの富貴「ふうき」をむ
さぼり申さずよろしく心中さつしなかる

べしあらはしなく

月日 母まき

物種太郎殿へ

母が書置「かきをき」をみるとひとしく太良はたゞ
あつと斗りなきたをれいか成我は因果「いんぐわ」
にて世上の人には生「むま」れおとりあほうには

(2 29ウ)

生れしぞや我だに人なみの者ならば

敵うちに出立して母の殉死はあるまじ

きに世「よ」の義理といひ此物ぐさ敵打に
出さるゆへ母がおしへて此家の後栄「こうゑい」を

たのしむかとうたがはれん事をおもひて

の自害とはなさけなや我今年「ことし」廿

五才是迄父母にやしなはれ一寸の孝「かう」

もなさず先達しは何事ぞや口おしや

情「なさけ」なや是に付ても万左衛門其根元「こんげん」は

(2 30才)

きやつゆへとおもへは心かたまりし無念に

くれて物ぐさ太良むねにせまつて昏絶「こんぜつ」

し其まゝにふしけるに家内は太良を呼「よび」

生「いけ」介抱「かいほう」して是とても帰らぬ事なれば

母の遺骸「ゆいかい」を野辺におくり七日／＼の弔「とぶら」

ひおこたりなく忌日「きにち」をとりいとなみて後

太良は殿「との」の御前へ出敵打の願書「ぐわんしよ」をさ

し出す殿「との」ひらき御らんあるに元来我

まゝにそだち手跡「しゆせき」等も学「まな」ばねは鳥「とり」

(2 30ウ)

あと釘「くぎ」の折「をれ」をみるごとく落字「らくじ」まじりに書「かき」たるは何とぞ父の敵「かたき」不破万左衛門を打とり申度候間しばらく御暇「いとま」願ひ奉ると一句「いつく」の中にあはれをもよふしてへつらひ艶「つや」なくて一入「しほ」あはれにそ聞へける忠輝公なみだをうかめ給ひ物種太良をちかく召「めき」れ尤成ねがいなれとも元来汝は柔弱「にうじやく」にして棒「ぼう」一本ふる事あたはぬといふ生れ也敵は名におふ不破万左衛門などか是を打

(2 31オ)

事あたはんやかへり打に出るやうなる物なれは此義はおもひとゞまり父が家督「かどく」を相続するが汝が為には忠孝の二道「にどう」を守「まも」る所なればぜひとゞまれよと御恵「めぐみ」の一言「ごん」物ぐさ其まゝ泣「なき」たをれ情なや我君此太郎をあほうとあなどり給ふぞつれなけれ佐々木甚蔵には敵打をゆるし給ひいかなれば太郎には義理ある父「ちち」の敵を打せては給はらぬと君をうらみ身を悔「くい」

(2 31ウ)

て齒「は」の根「ね」より血「ち」を出しあたりの人に取付何とぞともに取成をたのみ敵打に出し給はれと或「あるい」は拝「はい」しかつはなげき愚「おろか」成身にて願ひけるはいとゞ哀「あはれ」にそみへにけり

忠輝公御仁心敵打首途「かどて」の事

并不破万左衛門福嶋へ奉公の事

さても上総介忠輝公は物ぐさがねかひ

尤には思召れしかとも柔弱「にうじやく」の太郎ゆへ此事をゆるし給はず然「しか」れとも太郎おして

(2 32オ)

再「さい」三願ひければ不便「びん」に思ひ給ひやゝ有て涙ながらいかに太良よくも願「ねが」ひたる健気「けなげ」也さほどにおもふ事なれば助太刀「すけだち」を打そへて敵うちに出すべしと聞より物ぐさ頭をふり有難「がた」き仰なれとも助太刀をたのみ敵を打たりとて人に笑「わら」はれ

ては母が所存「しよぞん」に叶はず只一人参るへしと
申てうけがはず殿「との」甚だかんじ給ひさすが
武門に生「むま」れしほど有てかゝる明知「めいち」の有

(2 32ウ)

とのを常にあほう／＼とはづかしめし我
こそ恥「はづ」かしけれとなみだをおさへ給ひ金「こかね」
作「つく」りのさしそへ手づからあたへ給ひ是は藤
四郎吉光「よしみつ」が打たる名作「めいさく」なれともこれ
を敵打の首途「かどて」に餞別「せんべつ」いたすとて給
はりければ物ぐさはつとおそれ入有難き
君の御慈恩「じおん」懸「やが」て敵の首引さけめで
度帰国仕り御尊顔「そんがん」を拝し奉らんと
申ければ有がたくも門出の盃「さかづき」を下し

(2 33オ)

給ひ金子三百兩路用「ろよう」として給はり
ければ物ぐさ其より此金子を肌「はだ」につけ
伯父都倉「とくら」一学「かく」に家内をあづけ其身
ははな／＼と行ゑもしれぬ敵をたづね
に出にける供をつれさせんといへ共聞
入すたゞ一人出んと望みけるをやう／＼大
三良といふ十三才に成小者「こもの」をともしなひ立
出るは助太刀してもらひしと人に笑「わら」はれ
ん事を恥て也愚「ぐ」に深智「しんち」有とは是「これ」

(2 33ウ)

等の事をいふ成へしかくて不破万左衛門は
越後の生駒「いこま」に身をよせしが此所も与「よ」
坂「さか」へ近ければたづね出されんも斗り難「がた」く
おもひ生駒の村を立出江州「がうしゅう」に至り夫
より京都へのぼりける此時京都には徳
川神君ふしみの城にまし／＼ければ諸
国の大小名「めう」我も／＼とあつまりはんじやう
いはんかたなし《此時いまだ江戸はなし大方／京都大坂に大名のやしき有》不破「は」
万左衛門は京都にのぼりかなたこなたとさ

(2 34オ)

まよひけるに水火「すいくわ」の天神興聖寺「こうせうじ」のあ
たりを通りけるに酒店「しゆてん」有旅「たび」のうさを

はらさんとかの酒店に酒をのみ居けるに
桐の党「とう」の看板「かんばん」着「き」たる奴「やつこ」ども三人ともに
酒をのみ居けるか友達同「どう」し口論「こうろん」を仕「し」
出しのちにはつかみ合けるゆへ万左衛門見兼「みかね」
其中へ取入双方をなだめてあつかひ中
直「なを」しなどゝ又酒をすゝめけるが一人の中「ちう」
間「げん」申けるは其元はいつくの人ぞや万左衛門

(2 34ウ)

今は乞食「こつじき」にも取入度身分なれば
よき手ながらもあれかしと思ひ我は越後
浪人「らうにん」也よろしき事あらば頼み入奉公の
のぞみ有て此地へ参る【るミセケチ↓り】たる者也と申
ければ中間「ちうげん」ども手を打てさいはひ成
かなよき事を申聞「きか」すへし我々は福嶋
衛門太夫正則「まさのり」殿の御内「うち」也其元にも我
等がやう成中間奉公「ぼうこう」はいかにさいはひ人足「たら」
ずして難義せりもしくるしからすは世話「せは」

(2 35オ)

いたすへしと申ける万左衛門今は何也【也ミセケチ↓成】とも
のぞむ事なればとかくよろしく願入と云
よりして不破をともし福嶋がやしき
へつれ歸りて改名「かいめい」して万介とていやしき
中間奉公をいたしける時に福嶋か嫡「ちやくく」
男「なん」武蔵守正利「まさとし」ある時北野天満宮へ
参詣いたされけるに万助に鎧「やり」を持
せ供人十七八人のびにて参り給ふ事
ありしに右近「うこん」の馬場「ば」にて芸州「げいしう」浪人「らうにん」

(2 35ウ)

樋口「ひぐち」瀬平といふ悪党「あくとう」者福嶋と
はしらずして乗物にらうぜきいたしけ
れは近習「きんじゆ」小性「こせう」等五六人取てかゝるといへ
ども瀬「せ」平は剛力「かうりき」なれば事ともせず投「なげ」
ちらしけるをみて鎧「やり」を持たる万介踊「おどり」
出うしるより引かつき前へなげふせ終「つい」に瀬
平を取ておさへければ福嶋正利「まさとし」大
夫より帰宅して父正則「まさのり」にかくと披露「ひろう」し

(2 36才)

万助を取立武士となしける是より岩倉
了祐とぞ名乗ける

(3 1才)

物種太郎第七

一 佐々木主従大坂へのほる事

并 不破「は」惣兵衛人違「ちが」の事

一 物種太良京都へのぼる事

并 大津宿「やど」やにてぬす人「びと」を斗る事

(3 2才)

物ぐさ太郎第七

佐々木主従大坂へのほる事

并 不破惣兵衛人違「ちがへ」の事

さるほどに不破常重は福嶋方へ

あり付主人武蔵守北野「きたの」へ参詣の

折から樋口「ひぐち」瀬平を生「いけ」どりけるその

武術「ぶじゅつ」に達「たつ」しけるをかんし五十石を

あたへ侍「さむらひ」に取立られ岩倉了「りやう」助と

口「く」し福嶋武蔵守の臣下と成然る

(3 2ウ)

に了介巧言令色「こうげんれいしよく」を以て主人に

【貼紙↓取】「とり」入へつらひけるほどに終には武蔵

守が寵臣「てうしん」と成にける扱又先達て不

破常重が為に打れたる佐々木義「よし」

遠「とを」が倅甚蔵家来岡平もろとも

本国越後を出立して諸国をさま

よひ色々旅の艱難「かんなん」をしのき敵不

破が行多をたづねもとむれ共一向「いつかう」し

れずいか様京都大坂は大小名「めう」のあつ

(3 3才)

まる所なでは是へ立越「こへ」たづねなば

不破が行多のしれる事もあらんかと

先大坂にこそそのぼりける夫より大坂の

神社仏閣「ぶつかく」を物見して人のあつまる

所はまなこを配り「くば」り不破が有所を訪「たづ」ねもとむれども何分しれずかれ是

とする中に慶長「けいちやう」八年と成けるが

此時徳川深君征夷「せいゐる」將軍の位に

のぼり給ひ大坂に諸国の大名「まう」参「さん」

(3 3ウ)

勤「きん」停止「てうじ」仰付られ大坂内大臣秀頼

公には撰河泉「せつかせん」の三国において蔵入

百万石にさだめ給ひける是によつて

大坂はさびかへつて京都専はら繁昌「はんじやう」

すしかるに深君江戸表に城を築「きつ」

き是に住し給へは京都にある大小

名「めう」のやしき多「おふ」く関東にうつり

ける去「さる」によつて京都大坂ともに一両

年にして大に衰微「すいび」しけるされとも

(3 4才)

佐々木甚蔵義久「よしひさ」は何より大坂の

城内に心残りもしや不破常重城

中に身をよせやせんとうかゞひける去

ほどに大坂の執事「しつし」行桐東市匠「いちのかみ」且「かつ」

元「もと」が臣「しん」に不破宗兵衛といふ者有

元来剛氣「かうき」者にして武術「ぶじゆつ」をこの

みけるか常に此男深「ふか」あみがさを着

し歩行「ほこう」せり何ゆへなれば三年以前

疾病「しつびやう」をやみて鼻「はな」をうしなひ人目

(3 4ウ)

見ぐるしくおもひて笠「かさ」をはなさず

ある時座摩宮「ざまぐう」へ参詣し帰るさに出

入の魚やに行合たり魚「うを」や此時

三才斗の小児「せうに」を負「おひ」てゐたりしが早「さつ」

速「そく」軒「のき」につくばひ不破が通「とふ」るとまた

起上つて砂をはらひける時負「おひ」し子「こ」た

づねけるはとゞ様今の伯父「をぢ」殿は誰「たれ」じや

といふ魚やこたへてあの侍「さふらひ」は不破と

いふ旦那「だんな」様也といふて通りけるを甚

(3 5才)

蔵主従「しう／＼」きゝて大によるこびもしや
尋ねる常重にてはなきかと思ひ

岡平はしり寄「よつ」て魚やを呼「よび」かへし其
元只今平伏「へいふく」せられし旦那といふは
城内の侍「さふらひ」なるやうをや是を聞ていか
にもあの侍は御城内にて不破「は」惣兵衛と

申人也とこたへける岡平申は何ゆへに

あみ笠をかぶり顔をかくせしや魚「うを」や

申はいつも外「そと」へ出らるゝ時は笠「かさ」を着「き」

(3 5ウ)

て歩行「ほかう」なさるゝと語「かた」り帰りける義

久主従うをやが咄「はな」しを聞て扱こそ不

破常重改名「かいめい」して城内にかくれ忍「しの」

ぶとみへたり追付てとくと人相「にんさう」を見

んと兩人はあとをしたひてはしり追「おい」

付「つき」うかゞひ見るに其まゝ常重に

似「に」たり只顔のみしれねば岡平色々

としてのぞき見るにいよ／＼相違なし

さてこそ万左衛門也と本町橋の上にて

(3 6才)

甚蔵こへかけいかに万左衛門父の敵「のが」

さじと呼はりける不破惣兵衛大にお

どろき立とまり我まつたく敵と呼「よば」れ

る覚へなし人違「ちが」ひにてあるへしといふ

岡平すゝみ寄「より」人違とは比興「ひけう」千万

笠「かさ」をぬげといふまゝに惣兵衛があみ

笠を引とりみればこはいかに大に相「さう」

違「い」しあきれはてたる風情「ふぜい」也惣兵衛

大にいかり汝等にくきやつ等かなとくと

(3 6ウ)

人を糺「たゞ」さずして我笠を引立し

奇怪「きくわい」さよ下郎「げらう」の身として我にちじよく

をあたへし腹立やとすぐ様岡平が

髻「もとどり」つかんで引よせ足下「そくか」にふみ付さん

／＼にてうちやくす甚蔵大におどろ

きちに両手をつき全「まつ」く兩人とも若「じやく」

年「ねん」ゆへそこつせし条真平「まつひら」御めん下さ

るへしと詫「わび」けれども惣兵衛元来「ぐはんらい」短「たん」才「さい」剛氣「かうき」の者ゆへ一向「いつかう」聞いれず甚蔵

(3 7才)

もろとも下部「しもべ」にいひ付てうちやくしけるされども主従は大望「たいもう」ある身ゆへ手むかひせずして存分「ぞんぶん」に打れけるすでに衣類「いるい」もやぶれ泥「どろ」に手足をよごし見ぐるしきありさまに惣兵衛

心ちよく打ながめさまくゝに悪口「あくこう」して城内へ帰りけるあとに佐々木主従は若氣「わかげ」のあやまりにはやり過「すぎ」不破惣兵衛を万左衛門也ととり違「ちが」へ大にてうちやくせ

(3 7ウ)

られ無念のなみだ袖をうるほし

我あやまりゆへせひなく旅宿「りよしゆく」へ帰りける

物ぐさ太良京都へのほる事

并 大津宿「やど」やにて盗人「ぬすひと」を方便「たばかる」事

さても物ぐさ太良利休「としやす」は不破万左衛門を

たづねんと本国越後を立出て宿「やど」り

さだめぬ旅「たび」のそら大三両良ていまだ十

三才なる者を供につれもゝ引脚半「きやはん」

藤「ふぢ」ごほりを背中「せなか」に負「おひ」先京都を

(3 8才)

さしてのぼりける然るに濃州「ぜうしう」関「せき」が

原「はら」に來り見れば先年打死せし者

の死がいをもつ塚「つか」に埋「うづ」み香花「かうけ」をそなへ

大卒都婆「おほそとは」を建「たて」あり太郎思はず無「む」

常「じやう」を觀「くわん」じいかさま武「ものゝぶ」の家ほと浅「あさ」ま

しき物はなし命は義によつて軽く

先達の合戦に打死せし人みな一墓「いつほ」

の中に築「つき」こめつきて高名せし人々

は其名をしるされ打れし人は何と

(3 8ウ)

いふ者やらしれず只あさましく其

名を苔「こけ」の下にかゝれけるこそあわ

れ也捨「すつ」べき物は弓矢也とかの薬師「やくし」

寺「じ」次郎左衛門が口すきみしも理「ことは」りかなと
物種は其夜関「せき」が原の塚「つか」のものに夜
とゝもに唱名「せうめう」して打死せし人々の
追善「ついぜん」をなしにけるこそやさしけれ
其翌日京都へのぼりける

私にいはく関か原物うき地蔵「ぢそう」「連」とて「

(3 9才)

石仏「せきぶつ」あり是は太郎父の仇「あた」を打
てのち出家し通圓「つうゑん」と成てひたすら

に此関が原の死塚「しづか」をあはれみて

地蔵「ぢそう」一体「たい」を作る打死せし者の後「ご」

世「せ」の為に此所へ宇治よりおくる所也

然れとも後人「こうじん」あやまつて物くさ地「ぢ」

蔵「ぞう」を物うき地蔵といふとみへたり

猶里人「さとびと」にたよりにて尋ぬへし

かくて物ぐさ太郎京都をさして上り

(3 9ウ)

ける然るに此海道「かいどう」すじにて旅人「りよじん」の
金銀をかすめとる竹田茂平といふ

者有太郎多「おほ」くの路金「ろきん」を持し事

を知つて其身も旅人とすがたをやつし

みちづれと成にける太良は五百石を

領「りやう」せし身ゆへ一向「いつかう」かやうの悪徒「あくど」とはおも

ひもよらぬ事なれば入魂「じゆこん」にしける宿「やど」

も宿にとまり茂平は金「かね」をうばゝんと

すれども肌打替「はだうちかへ」に入て用心きびし

(3 10才)

く風呂「ふろ」などへ行「ゆく」時も湯殿「ゆどの」へ持ゆき
ゆだんせぬゆへうばゝふ事あたはず終

に大津「おつ」のとまりに至る迄付行「つけゆき」ける

太良は京やといふ宿やに泊「とま」りける

に茂平もともに此旅宿「はたご」やにとまる

太郎申は一樹「じゆ」の陰「かげ」一河「が」のながれとは

いひながら其元とふと道「みち」づれと成て

入魂にいたしたれられうれしく存る也

然るに此よりは京都へおもむき候へば

(3 10ウ)

さだめてこよひが名残「なごり」成べし其元も定「さだ」めて用事有て京都へのほり給ふならんもはや今宵「こよい」かなごりさて／＼残り多「おゝ」く候といへば茂平申やうされば我等も京都に用事あれとも其元

にも京見物の事なればともに見物「けんぶつ」仕り御同道「どうく」いたすへしときゝて太郎ふ審「しん」におもひけれども心付ずして台「だい」所にて茶「ちや」を乞「こひ」けるに此宿の亭主「ていしゆ」

(3 11オ)

太良にさゝやきけるは其元さまは定「さだ」めて田舎「いなか」の人ゆへ御存じあるまし御同道せられしは此海道「かいどう」のぬす人「びと」竹田茂平といふ者也ゆだんあるなとしらせける太郎大におどろきよくこそ知「し」らせ下されたり此ごろより道づれと成しかとも心得ぬ者と随分ゆだんはせさりしがさやうの者とはゆめかともしらずと亭主「ていしゆ」に一礼し夫「それ」より裏「うら」へ出庭「には」の小石「こいし」を拾「ひろ」

(3 11ウ)

ひ紙につゝみ我肌「はだ」【貼紙 に】打替「うちかへ」に入置誠の金「かね」は風呂敷「ふろしき」にかくし置「をき」けるに湯「ゆ」わきければ何「いつ」になく物くさかの肌「はだ」打「うち」がへを取てふるしき包「つゝみ」誠の金は手「て」ぬぐひにつゝみ湯「ゆ」に入に行ける竹田茂平是をみて大によるこび大三良を呼「よび」て勝手「かつて」へ茶「ちや」を乞「こひ」に頼みやり其あとにてかの肌「はだ」打かへをそつと取引さげ見れば金三百両ほどの重「おも」さ茂平や

(3 12オ)

がて懐中「くわいちゆう」して是ほどの金なれば肌をはなさぬも理「こと」は「り」也とひとりうなづき用をいゝのへる体「てい」にて立のきける物种は障子「せうじ」のやぶれより覗「のぞ」き見てさて／＼おろか成ぬす人「びと」かなと手「て」を打てわらひけるそれより元「もと」のざしきへ戻「もど」り

ひとり笑「ふみ」して居たりしが亭主を呼「よん」で物がたりをぞいたしける

(3 13才)

物種太郎第八

一 物種東坂本に閑居「かんきよ」の事

并 北野「きたの」絵馬舎「ふまや」にて甚蔵に逢事
一 千「せん」の宗三芦「あし」や釜「がま」拝借の事

并 宗三岩倉了祐「りやうすけ」を欺「あざむ」く事

(3 14才)

物ぐさ太良第八

一 物種東坂本に閑居「かんきよ」の事

并 北野絵馬舎「ふまや」にて甚蔵にあふ事
さるほどに物ぐさ太郎は宿「やと」やの亭主「ていしゆ」を座しき【補入 へ】まねき申けるは扱々おそろしき事かなすでに路金「ろきん」を只今ぬす人うばはれんといたしたりしかれともかやう／＼にいたして帰したりと申ければ亭主「ていしゆ」三良兵衛申けるは夫はよくも斗られしもの哉

(3 14ウ)

きやつは竹田茂平とて此海道にて

多「おと」くの旅人「りよじん」を【をミセケチ↓の荷物を】ぬすめ取金銀をうばふ夫はかく別何とやら其元様は見覚有

御方也もしや越後の国与坂にては

なきかと尋ねける物ぐさ大におどろき

いかにも我は与坂「よさか」の家中也又我をよく

見しりたる其元「もと」はいか成人ぞや亭主「ていしゆ」

三郎兵衛手を打てさて／＼よくも似「に」た

る人もある物かなとおもひしが其方様「そなたさま」

(3 15才)

の御名「な」は物ぐさ太郎とておろか成生「しやう」得「とく」也しが何ゆへ只今ははつめいなるぞや是を聞て物種いよ／＼不審「しん」におもひ其方よくも我をしれとも某は一向「いつかう」しらずいか成人ぞや亭主「ていしゆ」こたへて某は与坂の城下にて田蓑「たみの」や吉兵衛といふ町人の倅也しが先達て五年以前神「じん」

事「じ」に人をあやめ入牢し一命「めい」にも
およぶべき所我父吉兵衛は其元様の

(3 15ウ)

御継父新左衛門様入魂「じゆこん」ゆへ段々願「ねが」ひ
終には新左衛門様の御なさけにて一命
をたすかり本国を追放「ついほう」仰付られ夫
より此所へ来り身をよせしが間「ま」もな
く此家へ入むこと成今にはんじやう致
し相続「さうぞく」するもひとへに新左衛門様に助「たす」
けられしゆへ也さてくうれしや国元
のうはさ久しくうけ給はらす新左衛門様
もさだめて御息才「そくさい」に御暮「くら」し成べし

(3 16オ)

まづ何角「か」ゆるりとこよひは古郷「こけう」のはな
しうけ給はらんよき御方に御宿「やど」申せし
物かなとけしからぬ亭主「ていしゆ」のよろこび夫
より酒肴「しゆけう」を出してもてなし奥底「おくそこ」も
なくみへにける太郎心中によるこひ我
も京都はじめての事なればよき便「たより」
を持たりとうなづき三良兵衛ををく
へまねき申けるは一大事なれとも我父
に一命をたすけられし者なれば外

(3 16ウ)

へもるゝ事はよもあるまじ汝が所存「しよぞん」
をよくさつしつゝまず件「くだ」り聞すべし此
三年以前不破「は」万左衛門といふ者奸斗「かんけい」
を以て一揆「き」をおこさせ佐々木義遠
をころし己「を」のれ「が」つみを百性にゆづりしを
我父実「じつ」也とおもひ不破が謀斗「ぼうけい」に
あたり百性を無実「むじつ」のつみに行「おこな」ふ
此つみによつて父も切腹「せつぷく」せられしを
我はもとよりあほうにして少しも敵打

(3 17オ)

の所存なかりしに母が自害「じかい」してすゝ
められしよりはじめて心付日比の阿「あ」
房「ほう」もたちまちに今は誠の本心に

成て夫より殿「との」に御いとまを願「ねが」ひ今
此地までさまよひ来りしも敵万左
衛門を打「うた」ん為也是より其方も
ともに我力「ちから」と成て常重「つねしげ」をたつ
ね給はれかしたとのみければ三良兵衛
大におどろきさて／＼おもひよらぬ不

(3 17ウ)

破が為に切腹とは残念至極此
上は御たのみにしたがひ命のおやの
新左衛門様きつと深恩「しんおん」わすれされは
不破「は」がゆくゑをたづね敵を打せ申べ
し定「さだ」めて京都に身をよせしの
びるもはかられず是よりは私が今
の養父「やうふ」が隠居「いんきよ」東坂本に候へは此
隠居所にしのび居てより／＼に京
都へ出敵をたづね給へかしとて翌「よく」

(3 18オ)

日「じつ」かの坂本へつれ行物ぐさ太郎并「ならび」
に大三良兩人をともしなひ養父方
にかくまひ其世話いはん方なし情
は人の為ならずとは是等をやいふへ
き一旦「たん」新左衛門がなさを受し三良
兵衛かくまでせわをいたしける是
より物種は心よく東坂本に住「ぢゆう」して
翌々「よく／＼」には京都へ立越「たちこへ」敵の行「ゆく」ゑを
たづねけるに是ぞといふ手「て」がらもな

(3 18ウ)

く色々と心をくるしめける扱又
佐々木主従は大坂本町橋にて城
内の侍「さふらひ」不破惣兵衛を取ちがへてうちやく
にあひそれより京都をたづねんと
夜舟「よふね」にて伏見に着「つき」夫より京に至り
三条「でう」の橋詰驚「わし」や九兵衛方に旅「りよ」
宿「しゆく」して都「みやこ」の町を立横「たてよこ」たづね北野
天神へ参詣せり佐々木主従「しうぐ」うる／＼
と人群集「くんじゆ」の所あるひは売薬「ばいやく」又

(3 19才)

は放下師「ほうかし」などを見廻して天神の
下の森「もり」経堂「きやうとう」の前を通影向「えうがう」の松
右近「うこん」の馬場「ば」東むき観音を拝「はい」し
天満宮の廟「びやう」に参詣し後の社「やしろ」に
まはり北野の社老松「おいまつ」のやしる其外
末社「まつしや」西には朝日寺連歌堂「れんがどう」船
のみやなどへも参詣し絵馬舎「ゑまや」の
前に出たり扱も物ぐさは敵を訪「たづ」ね
北野天神のやしろは人立多「おゝ」き処

(3 19ウ)

なればとたづね来り大三良をとも
なひ絵馬舎「ゑまや」に立よりながめける中
に曾我「そが」兄弟の敵打の絵馬あり
是をつくぐとまもり見ていにしへ
はかく部「へ」や住の身を以て鎌倉の
大身「たいしん」工藤「くどう」左衛門といふ大名「めう」を心よく打
たるためしあれば我々何条「なんどう」神仏
の加護「かご」を以て敵不破ごとき者を
打得ん事のあるべきやとおもはずも

(3 20才)

絵馬「ゑま」に見とれてうつとりと杖「つへ」を
つき佇「たゞすみ」居る所へ佐々木も来り見
れば物「もの」ぐさ太良也ければ甚蔵声
かけ物くさ殿にてはなきやと聞より太
郎おどろきみれば佐々木甚蔵主従
也是はめつらしや堅固にてありしやと
夫より傍「かた」への茶みせに立より佐々木
甚蔵たづねて申けるは其元には公用
にても有て当地に來られし者成

(3 20ウ)

かと聞て太良申やう某もかやう／＼の次
第にて不破を尋ねる所也しかるにかく
対面いたす上は是よりもともに敵をた
づね打べき也其ゆへは其元壱人してうち
給ひなば某が所存「しよぞん」むなしく相成又
我等一人して常重を打ば貴殿「きでん」残「ぞん」

念「成」へし夫「それ」ゆへゑこのなきやうに同「どう」
道「く」して敵を尋「たづね」と相對「あいたい」して佐々木
主従をともしひ東坂本の閑居「かんきよ」に

(3 21才)

つれ帰りはより三人一致「いつち」して敵不
破か有所をたづねもとめける

千「せん」の宗三芦「あし」や釜拝借「はいしやく」の事

并 宗三岩倉「いわくら」了祐「りやうすけ」を欺「あざむ」く事
さるほどに不破万左衛門は福嶋の嫡子武
藏守が家臣「かしん」と成て五十石を拝領し
けるが先達て將軍神君江戸表へ
かへり給ひければ福嶋も江戸金杓「かなすぎ」
にやしくを拝領して住「ぢう」しけるしかれ

(3 21ウ)

どもいまだ京都の下やしき榎木「さはらぎ」町
のやしきは其まゝにして京都に至け
る此時不破「は」常重は主人武藏守殿
もろとも江戸表にうつり居たりしが

主人武藏守殿けしからぬ茶道「ちやどう」を

このみ給ひ京都にありし節は千「せん」の

利休「りきう」が末「すへ」宗三ともろとも毎日く

茶を立たのしみける折から芦「あし」や釜「がま」

とて父正則「まさのり」先君太閤「たいかう」様より拝領

(3 22才)

せし茶器「ちやき」を京都より今の江戸の

やしきへ持行給ふべき所を千「せん」の宗三

武藏守殿に願「ねが」ひ何とぞ此釜「かま」は祖「そ」

父「ぶ」利休「りきう」寵愛「てうあい」せられし(由)を聞然

るに君江戸表へ持行給ひなば此釜

に茶「ちや」を立る事まれ成へししばらく

拙者に御借用願「ねが」ひ宗三方にとゞめ

置ける武藏守心よくゆるし給ひし

が夫より二年「にねん」にもなれども宗三方より

(3 22ウ)

芦や釜をかへさす武藏守再度「ふたゝび」此

釜を江戸表へ取よせ度岩倉了介「りやうすけ」

を以て京都にのぼしける了介いそぎ

宗三が宅「たく」に至りけるに宗三奥「おく」に

請「せう」じて大にもてなし丁寧「ていねい」にいたし

ける了介は千の宗三に申やう此度某

上京いたせしは余「よ」の義にあらち【ちミセケチ↓す】先達

て其元君より拝借せられし芦「あし」や

釜「かま」是は太閤様より大殿「おゝとの」正則「まさのり」公へ

(3 23才)

給はりし御家の重宝「てうほう」なれとも其

元先祖「せんぞ」利休「りきう」が事を申て拝領「はいしやく」いた

されし所心よく主人其元に預け置「をか」

れし所也然るにさつそく返弁「へんべん」有べ

き所今に返済「へんさい」なきは主人をあざむ

くに似「に」たり此度はぜひ拙者「せつしや」に受取

帰り御やう仰付られたりとさも寛大「くわんたい」

に申ける宗三是を聞いていかに御心の

仰承知仕候さつそく御返済いたすべ

(3 23ウ)

き所に是上延引「ゑんいん」せしは拙者があや

まりまづ御酒を御上り下さるへし遠路

御くらう何分今日返済仕ると申て珍「ちん」

味「み」珍肴「ちんかう」を出してもてなしける了介思

はず大酒して暮方「くれかた」に成ければ千の宗

三「うや」敷「しく」芦や釜「がま」桐「きり」の箱に入て

持出れば了介はちろ／＼目にて箱より

取出し釜をあらためおさめて了介「りやうすけ」は

満酔「まんすい」と成てひよろ／＼と下やしき榼「さはら」

(3 24才)

木「ぎ」町に帰りけるかくて岩倉了「りやう」助其

翌日に至「いた」り昨日宗三方より受取帰

りし芦や釜を取出しみるにこは

いかに四つにか【ミセケチ↓わ】れて有ければ大におど

ろき扱は宗三めにあさむかれし奇怪「きくはい」

さよと真黒「まつくろ」に成て宗三方へおもむき

かやう成物を我にあたへしは何事ぞ

誠の釜を出せよと大に立腹「りつぶく」して

申ければ宗三もみて仰天「げうてん」し全「まつた」く

(3 24ウ)

其元をあざむきし覚へなし貴「き」
殿「でん」とくとあらため受取帰られし釜
の義なれば此方はしらず何ゆへかゝる
大切「せつ」の釜を受取ながらかやうに打
わられし事こそ安からね其上我「わが」
つみを拙者にゆづり誠の釜「かま」を出
せとは大成悪言「あくげん」但「たゞ」し夜前いくとあ
らため受取し釜をかやうの破釜「やぶれがま」
に仕かへ此宗三をこまらせ大金「きん」を

(3 25オ)

むさぼる所存「しよそん」なるか然らば其元は
福嶋殿の使者にてはあるまし世間
ぬす人なるへしとかへつて宗三大に
いかり此上は江戸表へ立こへ此むねを
武州「ぶしゅう」公へ言上せんとさま／＼にのゝ
しりければ岩倉了「りやう」介一旦「いつたん」あらた
めて持帰りしあやまりあれば何とこ
たへんやうも「なく」あきれ果「はて」たる斗り
なり

(3 26オ)

物種太郎第九

- 一 岩倉「いわくら」了「りやう」助京都を立のく事
- 并 常重宇治「うち」槇「まき」の嶋に忍「しのぶ」事
- 一 佐々木物種「ぐさ」宇治へまはる事
- 并 岡「をか」平不破「は」を見付る事

(3 27オ)

物ぐさ太良第九

岩倉「いわくら」了「りやう」助京都を立「たち」のく事
并 常重宇治「うち」槇「まき」の嶋に忍「しのぶ」事
天のにくむ所天かならず是を誅罰「ちうばつ」す
不破万左衛門は悪斗「あくけい」を以て多「おほく」の民を
くるしめ佐々木矢野「やの」物種の三人を奸「かん」
斗「けい」にて殺害「せつがい」しける天罰「ばつ」などかゆるし
給はんや我身は福嶋の家臣と成しが
此度芦「あし」や釜「がま」受取の役「やく」めをつとめ

(3 27ウ)

はからずも千の宗三が謀斗「ぼうけい」にあたり
かへつてぬす人ならんとの悪言「あくげん」受けられ共
夜前酒を過し熟睡「じゆくすい」し殊に茶器「ちやき」
の目利「めきゝ」などしらざるゆへ何心なくあらた
め取帰りしにやしきにて見れば破釜「われがま」
也何ともせんかたなく宗三が方へ行て
此事をいふといへとも中々聞入らず不破
今は大に当惑「とうわく」してしかれば此釜「かま」は
しばらく其元へ御預け申也某いたし

(3 28オ)

やう有と茶釜を宗三方に預
け置「をき」立出けれ共いたし方「かた」なくなたとへ江
戸表に帰りたりとも短氣「たんき」の武蔵守
殿よもや聞入「きゝいれ」あるまじ殊にひいきの宗「そう」
三「さん」なればかへつて其つみ我におちて切「せつ」
腹「ふく」か手打はさだまりし事也かくなさけ
なき役「やく」めを受取し我身こそなんぎ
なれぜひもなき次第也宗三を殺「ころ」
し我も切腹すればいさましきに似「に」た

(3 28ウ)

れども我とても国元にて佐々木義遠
を殺害「せつがい」しかく迄命ながらへし身が
宗三ごときの茶師「ちやし」の為に一命を
うしなはんも残念也此上は当所を立退「のき」
又よき主人をもとむへしと心決「けつ」し疵「きず」
持「もつ」足「あし」のなさけなき我理有なから是
を糺「たゞ」さず其まゝにて立のきける宗
三は了祐「りやうすけ」をたつぬれ共行方しれざ
れば大によるこび誠の芦「あし」や釜「がま」はかくし

(3 29オ)

置われたる似「に」せ釜を江戸へ持せ
行てけるは岩倉了「りやう」助使者に來り
候ゆへ釜をわたし候所其翌日「よくじつ」かやうの
似「に」せ釜を持來りさんゝに悪口「あくこう」し其
身は誠の釜「かま」を持立のき候由言上し

ければ福嶋武蔵守大にいかりにくき
岩倉がふるまひかな日本國中をさが
しかれめをたづね出しきつと罪「つみ」せずん
はあるべからずと夫より絵図「ゑず」を以てせん

(3 29ウ)

ぎせられける千の宗三は難「なん」なく武
蔵守迄あざむき岩倉了助をつみに
落「おと」して我身は安／＼と京都に帰りける
私にいはいはく千「せん」の宗三此時福嶋の重「てう」
宝「ほう」芦や釜を我家「いへ」にかくし似「に」せ
物を以て使者をあざむき武蔵守
までいつわりける其後「のち」福嶋家めつぼう
して今に至る迄芦や釜は宗三
が家「いへ」の重宝といたしける尤千「せん」の宗三

(3 30オ)

宅は上京小川「をがは」通り寺の内上る本「ほん」
法院「ほういん」前の町にて宗三と代々名乗「なのり」
此家に芦や釜是ありくはしくは
行て問「とふ」べし
岩倉了「りやう」介は京都を逐天「ちくてん」して方々「ほう／＼」と
さまよひしが先年京都にてほう友「ゆう」た
る者今宇治のさとに獵「りやう」をなして暮「くら」
しける元来安藝「あき」の大守「しゆ」につかへ真杵「ますぎ」
弥平治とて相應「さうおう」の身代「しんだい」也しか浪人し

(3 30ウ)

て此宇治に住しけるかねて不破とは入「じゆ」
魂「こん」也しゆへ常重此方へ逃「にげ」来り万事
を頼みけるに弥平治も今こそいやしき
獵師「りやうし」の業「わざ」をすれとも以前はさび鐘「やり」
も持せし身ゆへ少しも辞「じ」する事なく
心よくかくまひけるさて弥平治申は此度
其元のなんぎは随分いひわけの立事
なれども其かはりには切腹いたさねはなら
ず何分身をのがるゝも上分別「ぶんべつ」也幸「さいはひ」

(3 31オ)

此宇治の槇嶋「まきのしま」は中々人のしる所なら

ずして閑地「かんち」には至極「しごく」よき所也此地にて心しづかに忍「しの」び給へと異義「いぎ」なく申ければ不破大によるこび是より槇「まき」の鳴にしのびける

物種佐々木同道「どうく」にて宇治巡見「じゆんけん」の事并 岡平不破を見出す事

すでに慶長九年甲辰「きのへたつ」の春の比「ころ」物ぐさ佐々木の兩人は東坂本に有て京

(3 31ウ)

都のやうすをうかゞひけるに中々不破が有所しれず然るによしなき所に

長居「ながい」は無用さだめて江戸は近年繁「はん」昌「じやう」の地なれば是に忍「しの」び居るも斗りがたしと相談して亭主「ていしゆ」三良兵衛にも

此よしを告「つげ」て東坂本の閑居「かんきよ」を立出東海道「とうかいどう」よりおもむかんと出立しけるが太良申けるは我久「ひさ」しく京都近在をめぐりて敵をたづねしかともいまだ宇

(3 32オ)

治のさとをめぐらすまつたくなぐさみ

にはあらねども伏見より宇治を廻「めぐ」り

夫より南都「なんと」に出伊せへ参宮「さんぐう」して江戸におもむかんはいかにと申ける甚蔵聞

ていかやうとも兎角「とかく」いづくをめぐるも敵の行ゑを尋ぬる事なればよろしく斗「はから」

ひ給へとて夫より大津追分「おいわけ」に出て伏見をさしていそぎける伏見にて昼食「ちうじき」

をとゝのへ豊後橋「ぶんこはし」を渡りはるかに見れ

(3 32ウ)

ば又宇治の里「さと」のけしきは他「た」に入「しほ」まし

京には朝日「あさひ」山小倉堤「をくらつゝみ」を南へ行は川瀬に行千鳥水底「みなそこ」清「せい」くくと宇治川の

ながれはいづく波間「なみま」なく芦分舟「あしわけふね」におどろきて菅「すげ」の庭鳥「にはとり」さはぐ成かおもへはむかし人丸も此宇治川によめる歌に

武士の八十「やそ」うち川のあしろ木に

いさよふ浪「なみ」の行ゑしらすも

誰「たが」身の上も行来とてしらるゝものは嵐「あらし」

(3 33才)

ふく後「うしろ」にみゆる城「しろ」山は古太閤「こたいかう」御在「ごい」
世「せ」の御時は諸国の諸侯「しよこう」群参「ぐんさん」して富「とみ」
さかへしも今はたゞ去「さん」ぬる五年の乱「みだ」れ
よりこと／＼く破却「はきやく」して今は淋「さび」しきうた

かたやあはれむかしの物語りはるかに見ゆ

る音羽「をとほ」山霞「かすみ」にきへてかすか也彼是

ながき小倉堤「をくらつゝみ」やう／＼に来て榎嶋「まきのしま」名「な」

に立はなの小嶋「しま」が崎「さき」梶原佐々木が先「せん」

陣後陣「ちんごちん」其名「な」は今に立「たつ」か弓「ゆみ」同「をな」じ

(3 33ウ)

ながれの甚蔵はいまだ敵を打ずして

斯「かく」さまよふかなしやと俱「とも」にあはれを物

ぐさか宇治の瀬「せ」をみてよめる

数しらぬ身を宇治川の網代「あじろ」木に

多「おゝ」くの日をも過しつるかな

是より榎嶋の社「やしろ」にもふで平等院「びやうどういん」に

参詣し扇「あふぎ」の芝「しば」つり殿「どの」鳳凰堂「ほうわうどう」恵「ゑ」

心僧都「しんそうづ」の作「つく」られし零仏「れいぶつ」前に見へたる

山吹の瀬「せ」より頼政「よりまさ」の墓「はか」それより縣「あがた」大

(3 34才)

明神に参「さん」けいして何卒「とぞ」敵を早く

打「うた」せてたべといのるより外「ほか」ぞなき扱又

宇治橋を渡りて南「みなみ」をみれば十三重「ぢう」の

塔「とう」ましろふに瀬々の網代「あじろ」に波越「なみこへ」て

橋をわたせば休息所「きうそくしよ」とある茶みせ

に立寄てたばこにてもくゆらして気「け」

色「しき」をながめなどして居たりけるさても

不破万左衛門は宇治榎嶋「まきのしま」にしのび居て

もはや半年も過ければ人を憚「はゞ」かる

(3 34ウ)

心もなく真杓「ますき」弥平治諸「もろ」ともに舟

に取のり網「あみ」をもつて魚「うを」を取手なれ

ぬ業「わざ」もいつしか覚へ今は獵「りやう」を手傳「てつたた」

ひあみを引我心にもむつかしき武士

奉公せんより漁父「りやうし」ほとおもしろき者は
なしとよろこんで南の方より舟「ふね」をこぎ
来りしが佐々木が下郎何心なく宇治
橋の傍「かたはら」におとがひ持せて有をながめて
居たりしがこぎ来る猟船「れうせん」橋の木の下の

(3 35才)

に至りしがさつと吹来る春風に万
左衛門が着「き」たる菅笠「すげかさ」を吹とられ笠は
浪にたゞよひける万左衛門大におどろき
かさをとらんとあせるを岡平きつ
とみるに日来たづぬる不破常重「つねしげ」
也扱こそと大によるこび主人にかくと
告「つげ」ければ物ぐさ佐々木の兩人もとも
におどろき橋「はし」の上よりさしのぞき我
々を見付なばかくるゝ事も有やせん

(3 35ウ)

と扇「あぶき」を以て顔「かほ」をかくしよく／＼みれば
いよ／＼不破に相違なしされとも舟「ふね」
と橋の上の事なれは何とせんかたも
なかりける佐々木甚蔵ははや敵打の
用意してすてに名乗「なのら」んとしけるを
物種制「せい」してさやうにはやまる時はかならず
仕「し」そんずる事あるへしとかくあの舟「ふね」をみへ
かくれにして揚「あが」る所こそ勝負の場所「ばしよ」
かやうにめぐり逢「あひ」なからそこつして取逃「にが」

(3 36才)

しなば何ぼうか口おしからんかならず
せく事あるべからすと下知をなして堤「つゝみ」
をつたひ舟につれこぎ着「つけ」る所をもと
めける何「いづ」れゆねの行ぬ所はなけれども
或は在家「ざいけ」にへだゞり又山にかくれ見
うしなふ事殊には廣「ひろ」き宇治川の行「ゆく」
ゑもしれぬあみ舟に取魚「うを」より不破
が身の命はかなき我身「わがみ」ともしらずし
ておもしろ気「げ」に魚「うを」を取て川つたひ

(3 36ウ)

にのぼりけるあやふかるし事共也此「こな」
方「た」はうれしく堤「つゝみ」傳「つた」ひ影「かげ」をかくしてし
たひ行「ゆく」心の中「うち」こそ嬉「うれ」しけれ

(3 37才)

物くさ太郎第十

一 岡平真杵「ますぎ」弥平治を殺す事

并 物種佐々木不破「は」を生「いけ」とる事

一 物種佐々木敵打の事

并 宇治通圓「つうゑん」茶「ちや」や由来「ゆらい」の事

(3 38才)

物くさ太郎第十

岡平真杵「ますぎ」弥平治をころす事

并 物種佐々木不破を生「いけ」どる事

さるほどに不破万左衛門常重「つねしげ」はかゝる
事とは露しらす真杵弥平治もろとも

に獵舟「れうせん」にてかなたこなたと乗まはし

十分に魚「うを」を取終に槓「まき」の嶋の岸「きし」に

着「つき」ければふねを乱杭「らんくい」にくゝり付船底「ふなそこ」
に置たる大小を取出し腰「こし」によこたへ

(3 38ウ)

ふねより何角獵道具「れうどうぐ」を取上打

かたげ堤「つゝみ」をみて甚蔵主従「しうく」はしり

来りいかに不破万左衛門佐々木義遠「よしとを」が

倅同苗「どうめう」甚蔵義久「よしひさ」也父の敵覚へあ

らんかくこせよと申ければ万左衛門おも

ひがけなく仰天「げうてん」せしが獵道具を

なげ捨「すて」申けるはいかにも汝か申ごとく

義遠を打し覚有かく露頭「ろけん」の上は

何をかつゝまん我を敵と付ねらふし

(3 39才)

ほらしさに打「うた」れ得させん物なれとも

かへり打にするかくこせよといふまゝに身

づくろひして脇指「わきざし」をぬきはなせば物

ぐさうしろより太刀をうばひいかに不破「は」

常重「つねしげ」汝が謀斗「ぼうけい」にあたりて切腹せし

物種新左衛門が嫡子「ちやくし」うつけ者の太郎也

じんじやうに勝負を決「けつ」せよと申ける
万左衛門みてから／＼とわらひ成程うつ
けの太良馬鹿者「ばかもの」迄ともに敵よば／＼り

(3 39ウ)

こそおかしけれ汝等我を打んと斗る
は蟪蛄「とうらう」が斧「をの」大木の蟬「せみ」およはぬ事
也とあく迄悪口「あくこう」しける佐々木主従
いかつてにくき廣言「かうげん」いで我々が手練「しゅれん」
をみよと打てかゝる物種はゆる／＼と
堤「つゝみ」に座してひかへたり真杖「ますぎ」弥平治
ともにおどり出助太刀御めんといゝさま
岡平に切てかゝる岡平心得たりと
わたり合火花「ひばな」をちらしてたゝかひける

(3 40オ)

が弥平治が帯「たい」せし太刀は山刀「かたな」ゆへ短「みじ」
しあしらひかねたゞよひければ岡平
氣を得て一喝「いつかつ」一声「せい」して切込「こむ」切先
何かは以てたまるべき弥平治が肩先「かたさき」四
五寸切さげたる是に氣「き」おくれして
たゞよふ有様見すまして切ふせ終「つい」にとゞ
めをさしにける万左衛門是をみて大
に力「ちから」をおとし今は叶はじと思ひ
けん詞「ことば」にも似「に」す逃出す佐々木主従

(3 40ウ)

あとより追「おつ」かけ比興「ひけう」未練「みれん」の者かな
かへせ戻「もど」せと追かくる万左衛門は足「あし」をそら
にして逃「にげ」□しが所詮「しよせん」堤「つゝみ」にては叶は
じと川へとんぶと飛込「とびこん」だり岡平少
しもゆるめず其身もつゞいて飛込川
中にて組合有にしたひながれ行
つゝみには佐々木甚蔵大にあせり只
手を上て声「こゝへ」かくる斗也物種「ものぐさ」太郎
は先刻より兩人がかゝかひを見物して居

(3 41オ)

たりしが不破叶はじと逃行し随ひ
ともに追行しが常重「つねしげ」川へ飛込しを

みてよこ手を打て大にわらひ扱々

不破「は」は見かけに似「に」ぬ馬鹿者「ばかもの」也いで引
とらへていましめんといふより早く小柄「こづか」
を取て手裏剣「しゆりけん」に打けるが万左衛門が
左りのうでにかつはと立常重此疵「きず」
にははる所を岡平得たりと無理無「む」
体「たい」に引上んとすれ共二人とも着「き」物

(3 4 1ウ)

に水ふくみ身の自由叶はず終には

精氣「せいき」をつかはし水につれてなかれ怪「あや」

うくみへにける物ぐさ丸はだかに成て

川へ飛「とび」入難なく岸「きし」にぞ引上たり

甚蔵よるこび父の敵ゆるさしと切

んとするを物種制「せい」していかに敵なれ

ばとて水を多「おほ」くくらひくるしむ病者

は打れまし又打たりとも手「て」がらには

あらず此まゝ本国へつれ帰り疵「きず」養「やう」

(3 4 2オ)

生「じやう」させ其上にて大守をうかゞひ心

よく敵打をいたしてこそ本重とも云「いゝ」

つべしと道理をつくして申ければ佐々木

主従物種が奥意「おくい」をかんじ入身を恥「はじ」

て詞にしたがひける夫「それ」より刀「かたな」の下緒「さげを」

にていましめ当所の代官所へ三人とも

立越「こへ」此おもむきを達「たつ」しければ代官

所にも徳川忠輝「たゞてる」公の御家来なれば

そまつには成がたしとて代官三木伴「みきばん」

(3 4 2ウ)

蔵が下知としてまづ物種佐々木主従

三人とも乗物にのせ不破「は」伴左衛門は網「あみ」

のり物にて役人十余人付そひ前後を

かこひ越後の国与坂「よさか」へこそはおくりけり

私にいはいはく佐々木主従「しう／＼」伴「ばん」左衛門に渡

り合たゝかひしに物ぐさは是にも

かまはず堤「つゝみ」に座して見物せしが

是いかにといふに敵は一人味方は三人

也其上常重「つねしげ」は国をさはがせし重「ぢう」

(3 43才)

罪人「どいにん」なれば生どりにして本国へ
つれ帰り大守「たいしゆ」に御うかゞひ申上其うへ
にてじんじやうに敵打をなさんと思
ひしに佐々木主従はやまりてたゝか
ひしゆへぜひにおよばす堤「つゝみ」にひかへて
すきをうかゞひ生どりにせんとの斗
ひ也然るに真杖「ますぎ」が岡平が為に
打れしを見て常重「つねしげ」へきゑき
して逃出す此時物「もの」ぐさも追行「おいゆき」

(3 43ウ)

し所伴左衛門叶はじと思ひ其まゝ水
中へ飛込「とひこん」だり物ぐさはを見て
よこ手を打てわらひしはいかに此
宇治川は湖水「こすい」より近く流水「りうすい」早
く水中にての自由「じゆう」叶はざるをよく
も斗りしつたるゆへ也すでに不破「は
岡平の兩人ながれ死せんとせしを
物ぐさ動「どう」せず丸はだかに成て水
中へ飛入兩人を引上常重「つねしげ」を

(3 44才)

召とらへ本国へおくりしは是ひとへ
に物種奥意「おくい」床「ゆか」からすや
扱も此時慶長「けいちやう」九年三月廿一日也夫「それ」
より廿四日に越後の与坂へ着「ちやく」しける三
木伴蔵はすぐ様登城「とじやう」して此おもむ
きを言上いたしければ大守「たいしゆ」忠輝公
はあまり久「ひさ」しく敵打のさたなかりし
ゆへさだめて物種は柔弱「にうじやく」の生れなれば
かへり打にあひしかと是のみ案「あん」じ

(3 44ウ)

給ひしに佐々木甚蔵にめぐり合
て無事に万左衛門を生「いけ」どり帰る事
ゆへ大に悦弄し給ひ三人の者を召
出し給ふ物ぐさ太良佐々木甚蔵同じ
く家来岡平みな地上「ちしやう」に平伏「へいふく」して

ありける忠輝公御悦弄の声高「たか」くくして
よくもぶ事「じ」にて帰りしこそよるこぼし其
上国郡「こくぐん」をさはがしあまたの諸士を殺「せつ」
害「がい」せし極悪人「ごくあくにん」の万左衛門を生どりしとは

(3 45才)

適「あつはれ」手がら也吉日をゑらみ敵打をいたさ
すべし汝等是より退出「たいしゆつ」して旅「たび」の心勞「しんらう」を
なぐさめよと三人ともに御暇「いとま」を下されし
こそありがたけれ主従不破「は」万左衛門を引
出し給ひ大にいかり声はげましいかに万
左衛門汝ゆへに多「おほ」くの百性をくるしめあま
つさへ四人の者を無成敗「むせいばい」させ其上佐
々木義遠を未練「みれん」にも飛道具「とびどうぐ」に
てころし我つみを百性にゆづりつみな

(3 45ウ)

くして矢野内匠「やのたくみ」物ぐさ新左衛門切腹「せつぷく」
せりかゝる大悪人の汝なれば逆「さか」ばつゝけ
にもかくべきやつなれとも佐々木物種の
兩人かねがひいまかせ命をしばらく助「たす」
け武士并「なみ」の敵打をゆるす也にくき
極悪人あれ打ふせて腹「はら」はんと下知し
給へば役人うけ給はり棒「ぼう」を以て五十
ばかり打たりける万左衛門は背中「せなか」を打
れし事なれば皮肉「ひにく」ともにやぶれさけ

(3 46才)

血「ち」ながれてみるも心地「こゝち」よし是より忠
輝公はいかりのあまり毎日／＼せめ給ひ
ければ不破は一向「いつかう」ころさるゝこそまし
ならめ毎日せめられ棒「ぼう」にて打れ身「しん」
体「たい」大につかれける佐々木物種是をな
げき殿「との」へ願ひけるは我々本重達「たつ」す
る迄かならずてうちやくの義は御免「めん」なし
下さるべしといる／＼わびけるゆへ殿「との」にも
やう／＼是をゆるし給ひける

(3 46ウ)

物種佐々木敵打の事

并 宇治通圓「つうゑん」茶「ちや」や由来の事

かくて慶長「けいちやう」九年五月十日吉日也「とて」

与坂の城下に敵打の用意有ければ

かねて此由隣国「りんごく」近遠に聞へて老若「らうにやく」

男女「なんによ」群集「くんじゆ」して見物山のことし与坂「よさか」

の長棍「ななかじ」町の裏手「うらて」に四間「けん」に三間の竹「やじ」

違「い」をゆひ棧敷「さんじき」をかまへ役人前後

をたゞしてひかへたり其日に至れば棧「さん」

(3 47才)

敷「じき」には三つあをひの放幕「まく」をうち中「ちゆう」

央「わう」には大守「たいしゆ」忠輝公家老「かろう」本多石見

側「そば」用人梅津五平次鈴鹿「すゞか」又兵衛う治「ぢ」

代官三木「みき」伴蔵《是は敵打見物仰付られ逗留也》其外我

もくくと一家中のめんく星「ほし」のごとく

霞「かすみ」に似「に」て我おとらじと見物す此時

廿二才斗の女白帷子「しろかたびら」を以て役人に

ねがひけるは私は不破万左衛門か娘にて

候が先達て当国を立のきし砌「みぎ」り

(3 47ウ)

すてられ只今は賤「いや」しき者の妻「つま」と成

て暮し候也然るに父万左衛門が重罪「ぢうざい」

をゆるし給ひ敵打仰付らるゝ殿「との」様

の御斗「はから」ひ有がたく存じ奉り候也是

は一重「ひとへ」の晒「さらし」なれども父が此世「よ」のおもひ

出敵打の晴着「はれぎ」に候へば此一重をあた

へ給はらば有りがたく候也と袖を顔「かほ」に

あてゝ願ひける役人も不便「びん」に思ひ此

よしを聞とゞけゆるしけるゆへ白帷子「しろかたびら」

(3 48才)

たすき鉢まき帯「おび」迄とゞのへて父「ちち」に

かくりけるおや子の中ぞ切「せつ」なれかくて

敵打の用意とゞのひければ東西より

拍子木「ひやうしぎ」を以て相図「あいづ」とせりやうく有

て東より物種太良利休「としやす」佐々木甚蔵

助太刀家来岡平三人白「しろ」かたびらに

鉢まきしめ太郎鐘を以て出れば

佐々木二尺五寸の太刀也西の方より

不破万左衛門御めんを受けて髪月代「かみさかやき」して

(3 48ウ)

我むすめのおくりし死出「しで」の晴着「はれぎ」とてものがれぬ命なれば死物くるひにはたらし打死せんとかくごせし事なれば勇「ゆう」

気「き」いやまし立出る双方床机「せうぎ」にかゝり

夫よりたいこを打ければ床机をはなれ

て殿「との」のさんじきへ一札して双方立向「むか」

へは物ぐさ佐々木声「こへ」をかけ年来の

うらみおもひしれやといひもあへず立

むかふ不破万左衛門大にわらひ一度「たび」死「し」て

(3 49オ)

二度は死す此不破一人して多くの人を

殺害「せつがい」せし事なれば所詮「しよせん」のがれぬ命

とかくごせし所也不便「びん」や汝等もともに

我為に打れ死出の旅路「たびち」の案内せ

よとあく迄悪言「あくげん」して刀をぬいて左右

に佐々木物種を受中央「ちうわう」に座した

り物種いかつてつきかゝる鐘をはづし

て受留佐々木が切返切先「きつさき」をかへし

と上段下段二人を打手に少しもひる

(3 49ウ)

まず万左衛門が死物ぐるひのはたらきに

何とか仕けん佐々木甚蔵一ヶ所疵「きず」を

受たり是に氣を得て万左衛門めつた

無性「むしやう」になぐり切さしもの物種鐘うち

おとされ飛さつて刀「かたな」をぬき又さん

にたゝかひけるが双方とも息「いき」づかひくるし

げにみへければ鐘「かね」をならして双方「さうほう」とも

休息し薬を用い氣をやしなひ再「ふたゝ」

度「び」太鼓「たいこ」を打ば又立むかふに物種大

(3 50オ)

に勇氣いや増「まし」獅子「しし」のあれたるいき

ほひ何かは以てたまるべきむかふと其まゝ

付入て切返切先「きつさき」万左衛門真向「まつかう」を切付

られ常重「つねしげ」まなこに血ながれ入今は

盲「めくら」打になぎ立る佐々木甚蔵これ
に氣を得てよこ合より付入腰「こし」の
つがひを切はなす常重二つに成てた
をるゝ所を兩人しづかに立寄「より」万左衛門が
胸先「むなさき」に刀をさしあて父の敵うらみの刀「かたな」

(3 50ウ)

おもひしれやとどめの刀さし通「とふ」しけ
る岡平もともに立より主人の敵と
切付終にはめで度「たく」敵を打おほせたり
忠輝公悦弄まし／＼出「で」かしたり兩人と
御ほめの詞にあづかり兩人はめんぼくを施「ほどこ」
しける君には御城内へ御帰り有て三人
を召出し給ひ佐々木甚蔵には父の
家督「かどく」をゆるし給ひ内膳と改名「かいめい」仰
付られ其上二百石加増「かぞう」して以上七百石

(3 51オ)

あて行「おこな」ひ給ふさて物種は三百石加増「かぞう」
して八百石と成有がたき由を言上し
其後御願ひ申上げるは何卒私家督「かどく」
は内膳「ないぜん」家来岡平に遣はされ又大三
郎と此兩人に物種の苗字「めうじ」わけあたへ
られ下さるべし私は敵さへ打ば出家と
成父母のぼたい又は不破が追善「ついぜん」をも
とふらひ度候と直「すぐ」に御前にて髻「もとどり」を切
はらひ通圓「つうゑん」と改名「かいめい」しければ殿「との」にも

(3 51ウ)

物種が広大「かうだい」の心ざしをかんじ給ひ岡
平大三良を兄弟となし三百石つゝ分「わけ」
給はり残り式百石を通圓「つうゑん」が隠居領「いんきよりやう」
に下し給はりける夫より佐々木物種は
一家と成て次第にさかへ御当家の忠
臣と成けるさて又通圓は敵を見付

出せし所は宇治「うち」の里「さと」もとより我好
む茶「ちや」の名所「めいしよ」なれば本国より宇治に
至り橋のもとにて茶「ちや」を立往来「わうらい」の

(3 52オ)

旅人「りよじん」に父母の為又は不破「わ」其外人々の
ぼたいの為接待「せつたい」しける其後通圓相果「はて」
て後も今に至る迄通圓茶やとて宇治
の橋「はし」の元に名を残しける後世に英「ゑい」
名を残すしるし成べし

物種太郎敵討終り

*『物種太郎』翻刻にあたり、快く許可して下さいました弘前市立弘前図書館に厚く御礼申し上げます。